

# キャンプ研究

Japan Journal of Camping Study

Vol.23 2020.1

公益社団法人日本キャンプ協会  
National Camping Association of Japan

未来テクノは、  
あらゆる繊維素材の  
加工を行います。



ターポリン・帆布の縫製・ウェルダ加工なら  
前田工織グループ  
**未来テクノ株式会社**

東京都港区芝公園2-4-1 芝パークビルA館12F  
TEL:03-6402-5915 FAX:03-6402-5916

[www.mirai-techno.jp](http://www.mirai-techno.jp)

# キャンプ研究

第23巻 2020年 1月15日発行

## 目次

### 研究論文

- 日本における組織キャンプのひとつの萌芽 ..... 3  
—学習院の游泳演習について—  
吉田大郎・林健児郎・酒井哲雄

### 実践報告

- 留学生・外国人を対象とした野外教育・宿泊研修の注意点 ..... 15  
—東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科の事例をもとに—  
三宅祐司
- デイキャンプ実習に参加したC大学保育・幼児教育専攻学生の生きる力の変容 ..... 23  
—先行研究(2泊3日)との比較による成果と課題の分析—  
古田康生・山本孔一
- 高校サッカー部新入生を対象とした組織キャンプの実践 ..... 33  
—チームビルディングを目的とした Action Socialization Experience の導入—  
高橋宏斗・伊原久美子・矢野達也・今村樹
- 野外で『うまい飯を炊く』調理法の検討 ..... 41  
—飯盒炊飯を負の歴史から考える—  
倉品康夫・宮内麻里香・柏木舞・滝島慎・露木拓実
- 地域研究：里山キャンプを考える ..... 47  
宮内麻里香・柏木舞・滝島慎・露木拓実・倉品康夫

### 資料

- 「キャンプ研究」投稿規程 ..... 55
- 「キャンプ研究」収録題目一覧 ..... 57
- 「日本キャンプミーティング」発表題目一覧 ..... 62
- 編集後記 ..... 65



# 研究論文



## 日本における組織キャンプのひとつの萌芽

—学習院の游泳演習について—

### Organized camping in Japan

- Focusing on Gakushuin school Swimming Exercises

in the late 19th to early 20th century -

吉田大郎(熊本県キャンプ協会) 林健児郎(公益財団法人大阪 YMCA)

酒井哲雄(大阪府キャンプ協会)

Taro YOSHIDA, Kenjiro HAYASHI, Tetsuo SAKAI

---

#### Abstract

The purpose of this study was to investigate the contents of Gakushuin School Swimming Exercises and verify whether it is suitable as the first organized camping in Japan. The author surveyed its history, regulation, and manuals, and examined the relationship with Nogi Maresuke. Nogi was the 10th Chancellor of the school and known as the first person to introduce tenting to this swimming exercise with his educational philosophy. He also met the Baden-Powell who was the founder of Boy scout movement in London in 1911 and introduced boy scout to Japan. Therefore, his first swimming exercises in 1907 was called “Scout Style” and recognized the first organized camping in Japan. The author also compared the definition of the organized camping which was made by American Camping Association and National Camping Association of Japan with regulation and manuals of the swimming exercise before Nogi arranged it. The results indicated that the swimming exercises began in 1880, the regulation and manuals had been arranged in a few years. Regardless of the tent stay, in the early stages of swimming exercise, the elements of organized camping were found in the regulation and manuals. July 1891 that was confirmed by the materials was recognized as a sprout of organized camping in Japan. In addition, the results also indicated that the swimming exercise conducted by Nogi in 1907 was eight days before Baden-Powell’s first camping at Brownsea Island. Nogi did not join the swimming exercises after he met Baden-Powell in London in 1911. Therefore, it is reasonable to recognize that it was not possible for Nogi to conduct “Scout Style” swimming exercises in 1907.

#### Keywords

Organized camping, Gakushuin Swimming exercises, Nogi Maresuke,

---

## 1. はじめに

日本の組織キャンプのはじまりについては様々な記述があり、(公社)日本キャンプ協会の指導者養成テキスト「キャンプディレクター必携」にも次のように記されている。すなわち「日本の組織キャンプは、20世紀の初頭から開始されており、早くは1907年に学習院の片瀬海岸で行われた水練を嚆矢(こうし)とする説もあるが、-以下略-」<sup>14)</sup>・<sup>①</sup>と書かれている。

ここでは学習院の水練が日本初の組織キャンプであるという説もある、として紹介されているが、この学習院の水練について内容を明らかにし、それが組織キャンプの嚆矢として相応しいかを検証することとしたい。

## 2. 学習院の轉地游泳演習

学習院は1877年(明10)に皇族・華族の子弟の教育機関として開校され、1880年(明13)より隅田川下流両国の中洲において夏期游泳演習を始めた。これは学習院独特の武科(課)と呼ばれる教科課程に含まれるものであり、「…前略… 武科ニ於テハ陸軍歩兵ノ式ニ倣(なら)ヒ、生兵操練ヨリ始メテ漸(ようやく)ク小隊中隊ノ演習法ニ進ミ、其他射的乗馬等ノ科ヲ教エ、又時々撃劍柔術及銃槍対闘術ヲ演習シ、夏期ハ水泳水馬ヲ為サシム。要スルニ貴族積年ノ流弊(りゅうへい)ナル柔軟纖弱(せんじゃく)ノ態ヲ破リ、強壯健康ノ体軀ト活發有為ノ精神トヲ養成スルニ在リ(学習院第八年報序)」<sup>4)</sup>・<sup>①</sup>という趣旨に依ったものである。(ルビ筆者以下同じ)

この游泳演習は1890年(明23)までは隅田川で行われたが、「水質河流等、游泳に不適當なる點(てん)多かりし」ことにより、1891年(明24)より場所を鎌倉の片瀬海岸に移し、同時に小堀平七を游泳の師範として聘(め)し小

堀流泳法を教授することとなった<sup>3)</sup>・<sup>①</sup>。

片瀬海岸での游泳演習は当初7月25日～8月21日の4週間であり、宿舍は腰越の龍口寺と常立寺を借用した。1905年(明38)には片瀬に游泳演習のための寮が完成し、またこの年に「轉地游泳演習規程」<sup>7)</sup>が制定された。

片瀬での游泳演習は1911年(明44)まで行われたが片瀬海岸も「夏期避暑客の往來極めて繁く」「學生の風紀上遺憾なる點尠(すくな)からざりし」<sup>3)</sup>・<sup>②</sup>となったことに加え「明治四十一年には迪宮裕仁親王(今上天皇)、四十二年には淳宮(秩父宮)雍仁親王、四十四年には光宮(高松宮)宣仁親王が初等学科に入学され、将来殿下方が游泳に参加される場合をも考慮して」<sup>4)</sup>・<sup>②</sup>1912年(明45)に場所を静岡県沼津に移した。

但し、1912年(明45)は7月30日に明治天皇が崩御されたため施設を新築したもののこの年の游泳演習は中止となった。しかし沼津での游泳演習は翌1913年(大2)年以降も学習院の大切な伝統行事として今日まで連続と続けられている。2012年には施設の改修が行われ、現在では游泳演習時の宿舍にとどまらず学習院のセミナーハウスの機能をも果たすものとなっている。<sup>5)</sup>

## 3. 乃木希典と片瀬海岸

はじめに述べたように日本における組織キャンプの始まりを学習院の片瀬海岸での游泳演習だとする理由には乃木希典の存在が大きく関わっていると思われる。

乃木希典は1907年(明40)1月に山口銳之助の後任として第10代の学習院院長に就任した。

乃木は院長就任以来、これまでの学習院の教育課程に変更を加えるなどして意欲的に生徒指導に当たっている。その一つが武課の



授業内容の改正であり、従来は希望者のみに教授した柔道・剣道を正課として課することとしたり、「従来學生に實施したる演習は、紀律訓練に於て利益する所尠(すくな)きを慮(おもんばかり)、寧(むしろ)大演習の見學に依りて、心身を鍛錬し紀律を嚴正にし、併せて實地に就きて軍事上の智識を學ばしむに如(し)かずとなし…中略… 其の見學を目的とする四泊行軍を行ひたるが、行軍中は學生をして成るべく露營せしめ、特に舎營せしむる場合と雖(いえども)、只屋内に雨露を凌(しの)ぐを以て満足せしめ、食事は軍隊より支給を受けて、兵食と同一のものを給輿(きゅうよ)したり。」<sup>3)</sup>・<sup>③</sup>と春秋に行っていた行軍演習の際の学生の食住をより簡素にするなどの変更を加えている。

乃木が游泳演習に初めて参加したのは1907年(明40)7月21日より始まる第17回目の游泳演習である。これまでは院長の游泳演習参加は儉閱(けんえつ)というかたちで一泊二日程度のものであったが、乃木は院長就任の1年目より全日程を演習場の天幕に起居し生徒とともに過ごした。また、この年の演習が始まる直前の6月には1905(明38)に制定された「轉地游泳演習規程」の第二十一条の但書「但シ四級生以下ト雖(いえども)教官ノ見込ヲ以テ許可スルコトアルヘシ」を改正して「但シ四級生以下ハ教官ノ見込ヲ以テ游泳ヲ休止セシムルコトアルヘシ」とし、さらに同心得に「希望者多数ナレハ天幕住居ヲナサシム」の一項を加えた。<sup>4)</sup>・<sup>③</sup>

このような規程の改正や変更は乃木の游泳観によるものであることが「乃木院長記念録」によって伺える。すなわち、乃木は游泳は精神修養を主眼とするものであって「簡易生活、共同生活の趣味を會得(えとく)せしめ、知らず識らずの中に自營、自治、克己の精神

を振作(しんさく)涵養(かんよう)せしむる」ということを第一義とし、游泳術の目的についても「水に親しみ水を恐れぬ習慣を作らしめ、一旦、危険に際しては不慮の沈溺(ちんでき)を免れ得るに至れば、能事了(よくことおわれりて、必ずしも絶妙の技に達することを要しない。一人の達人よりも寧(むしろ)十人の平凡な游手を造るのが本旨である」<sup>9)</sup>・<sup>①</sup>と述べている。

また、乃木が初参加した1907年(明40)の游泳演習からは参加者が増え、寄宿舎だけでは全員が収容できなくなったこともあり、「明治四十年には十数張りを設置し、翌明治四十一年には二十五張り天幕を設けて中等学科五年以上の學生は全員幕舎生活をした。」<sup>4)</sup>・<sup>④</sup>という記述等から、乃木による片瀬海岸での游泳演習が所謂組織キャンプの始まりであったという理解を生んだと言えるのではないだろうか。

片瀬海岸での游泳演習における乃木の関与は非常に積極的であり、生徒と同じ TENT に宿泊し、自ら褌(ふんどし)を締めて演習に参加するのはもちろんのこと、東京の学院で見せる厳格一徹とは違って親しい態度で生徒たちに接していたことも多くの人々の記憶に刻まれている。<sup>2)</sup> <sup>9)</sup> <sup>10)</sup> <sup>11)</sup> <sup>13)</sup>

乃木の游泳参加は6年間の院長在任中1907年(明40)より1910年(明43)までの4回である。(4回目の1910年(明43)には中耳炎を患い8月2日より東京に戻っている)

1911年(明44)は英国王ジョージ5世の戴冠式に出席する東伏見宮の随員として4月12日に横浜を出帆し6月7日英国に上陸した。6月22日の戴冠式に出席した後フランス、ドイツ、ルーマニア、トルコ、ブルガリア、セルビア、ハンガリー等を歴訪した後再びベルリンに戻りドイツ皇帝総裁の演習を陪観した。8月

16日にモスクーを通過し、シベリア鉄道を経由し8月28日に敦賀に上陸帰着<sup>11)</sup>しており游泳演習には不参加であった。また、翌1912年(明45)は明治天皇崩御のため游泳演習は中止されている。しかし、こうした短い期間の関与にも拘らず多くの影響を与えたことは乃木が軍人に止まらず教育者としても有能であったことを示す例証と言えるであろう。

一方、この游泳演習は乃木の院長就任以前より行われていた行事であり、乃木が従来の規程の改正を行ったと言っても「四級生以下の生徒でも泳力の優れた者は教官の判断で上級の訓練を受けてもよい」という項目を「四級生以下の生徒は教官の判断で游泳を休止させることがある」と改めたこと、また游泳心得に「希望者多数ナレハ天幕住居ヲナサシム」の一項を加えたことの2点であって、乃木がこれまでの游泳演習の内容を大きく変更した訳ではなく、前述の乃木の思いを規程の改定に込めたものであると言える。一説には「希望者多数ナレハ天幕住居ヲナサシム」としたことが組織キャンプの始まりのように理解されているむきもあるが、組織キャンプの定義には宿泊形態は触れられておらず、舎営であれ、幕営であれ アメリカキャンプ協会の定義に「The ACA community of camps promotes active participation, caring relationships, and focus on the emotional, social, spiritual, and physical growth of the individual. Camps vary in their purpose and desired outcomes, but each encourages risk taking, valuing the resources of the natural world, maintaining healthy lifestyles, and learning through a variety of fun and life-changing experiences.」(Basic Camp Management)<sup>1)</sup>とされ、(公社)日本キャンプ協会の定義にも「組織キャンプと

は、ある目的を達成するために十分に準備され計画されたプログラムを持ち、野外でのグループ活動や共同生活を通して、キャンパーに対して楽しく創造的かつ教育的な体験の機会や場を提供するキャンプのことである。また、組織キャンプでは、キャンプに参加する個々のキャンパーの身体的、精神的、社会的成長に寄与するための指導者と自然環境資源が用意される」<sup>14)・②</sup>とされており、その観点からすれば学習院の游泳演習は1907年(明40)に乃木が初参加した游泳演習を待つよりも以前から組織キャンプの要素を備えていると言えるものであり、日本における組織キャンプの始まりは1907年よりも前に遡ることが出来ると言えるのではないだろうか。

#### 4. 「轉地游泳演習規程」と「游泳要用書類」

2節で学習院の游泳演習について「1905年(明38)には片瀬に游泳演習のための寮が完成し、またこの年に「轉地游泳演習規程」が制定された。」と述べたが、1880年(明13)に始まった演習のための規程は正式には開始から25年後に制定されたことになる。

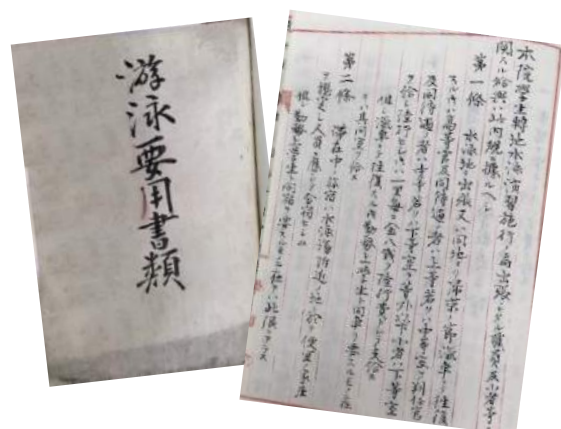


写真1 游泳要用書類 (学習院アーカイブズ所蔵)

しかし、正式の文書としての制定が1905年(明38)であるのであって、規程的なものは游泳演習が始まった当初から存在したと思われる。その一つが学習院アーカイブズに保管されている「游泳要用書類」<sup>6)</sup>である。残念ながら記述年月日が記載されていないため正確な成立年月日を特定できないが、隅田川での游泳演習についての記載であることから1890年(明23)以前のもと考えられる。

「游泳要用書類」は学習院専用の和紙用箋に墨書されており、「本院學生轉地水泳演習施行ノ為出張シタル職員及小者等ニ関スル給與ハ此内規ニ據(よ)ルヘシ」と「本院夏期休業中生徒ヲシテ水泳ヲ演習セシメンカ為メ左ノ概則ヲ設ク」の二種類の書類があり、後者の中に○職員、○授業方法、○水泳生徒心得の項目がある。そして、授業方法の第三條第二項に「八十間以上ノ千鳥泳或ハ向越(水泳場ヨリ濱町河岸ヘ至ル)等ヲ為(な)シタルモノハ乙ノ組ニ編入スヘシ」や第九條第二項に「遠流泳ハ水泳中一回若(もし)クハ二回(吾妻橋或ハ兩國橋ヨリ品川沖臺場マテ往復)施行スヘシ」、第十一條は「水泳場手配ハ別紙略圖(りやくず)ニ依ルヘシ」とあり別紙に兩國橋の記載のある略図が添えられていることから隅田川時代のものであることが分かる。

この「游泳要用書類」にある「本院學生轉地水泳演習施行ノ為出張シタル職員及小者等ニ関スル給與ハ此内規ニ據(よ)ルヘシ」には学習院の職員が水泳演習にかかわるための細かな規程が書かれており、第二條の但し書きに「勤務上學生ト同宿ヲ要スルモノニ在リテハ此限(このかぎり)ニアラス」と書かれていることから学生たちも合宿生活をしてきたことが推測される。



写真2 ○授業方法(左) ○水泳生徒心得(右)

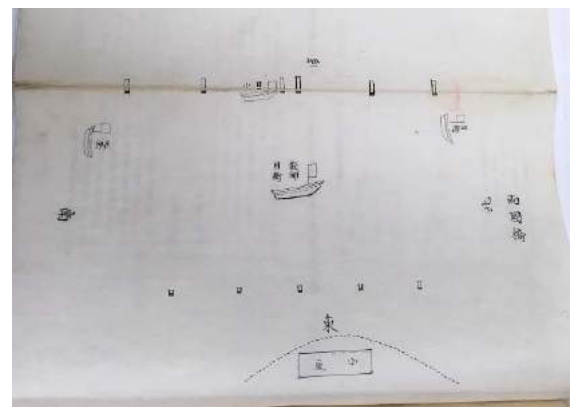


写真3 水泳場手配の略圖

また、「本院夏期休業中生徒ヲシテ水泳ヲ演習セシメンカ為メ左ノ概則ヲ設ク」の「○授業方法」には生徒の泳力によって全体を五つの組(丁・丙・乙・甲・得業)に分け、組毎の指導内容を示すとともに第十條では授業時間を定めており、これが後年制定された「轉地游泳演習規程」の原型となったと考えられる。

## 5. 「轉地游泳演習規程」の改定

1905年(明38)6月に游泳演習の内容を明文化して制定された「轉地游泳演習規程」(学習院一覽 自明治三十八年九月 至明治三十九年八月)<sup>7)</sup>は全22条及び付則からなるものであって、場所を相州鎌倉郡川口村字片瀬に設けること、宿舎は三寮で各寮に監督教官を二人以上

置くこと、游泳地日課時間は朝6時の起床にはじまり夜9時の消灯とすること等が規程されている。当時の規程としては特に厳しすぎるようなものではなく、参加する生徒の健康や生活に配慮されたものと言える。おそらく、1891年(明24)に游泳地を隅田川から片瀬海岸に移した頃から実際に行われていた内容をあらためて明文化したものと言ってよいであろう。

先述のように1907年(明40)6月に一部改訂された「轉地游泳演習規程」は1911年(明44)まで運用され、1912年(明45)に游泳場を沼津に移す際に制定された「学習院游泳演習規程および前期游泳演習寄宿舎規則」は1913年(大2)より1919年(大8)までの7年間運用された後廃止された。

「以後は各年度ごとに演習規程を定めることとした。大正九年以後は、後期游泳演習を廃して初等科・中等科・高等科合同の演習を実施している。しかし、年度ごとに規程を定めたのは三年間だけで、大正十一年五月には新しい学習院游泳演習規程を制定し、大正十二年これに大幅な改正を加え、以後毎年これを適用するようになった。」<sup>4)・5)</sup>のである。

## 6. 「第三回轉地游泳彙書」

学習院の游泳演習は非常に良く整えられた教育環境のもとに実施されてきたものである。

1891年(明24)游泳場を隅田川から片瀬海岸に変更する時の学院から保証人(保護者)に宛てた趣意書には「游泳ハ各人習得スヘキ必要ノ術ナルノミナラス、身体ヲシテ更ニ益々健康ナラシムルモノナリ。就中(なかんづく)浄澄ナル潮水ニ於テ之ヲ行フトキハ、其応驗著シキハ殊更(ことさら)言ヲ要セス。因(よ)つテ本年ハ游泳場ヲ相州江ノ島近傍ニ設ケ、

游泳演習ノ傍(かたわ)ラ学科ノ質問ニ応フル教官ヲモ派出シ、游泳散策ノ余又学業温習ニ便ニシ、夏季休業間、則(すなわち)来七月二一日ヨリ八月十八日マテ凡(おおよそ)四週間ノ予定ヲ以テ練習ヲ施行セシメントス。満十年已上ノ志願者ハ来ル五月四日マテニ左ノ雛形ニ依リ〔雛形略〕記名捺印ノ上学生監ニ申出ヘシ。依テ志願者一般ノ心得ヲ左ニ掲(か)かク。」<sup>4)・6)</sup>とあり、これは学校キャンプの案内書といっても良いものである。

尚、学習院は開校以来1909年(明42)まで9月始まり7月終わりの学期制を採っていたため、この趣意書にある「夏季休業間」というのは学年替わりの休業期間である。

1891年(明24)片瀬海岸で行われた游泳演習は公式的には第一回轉地游泳演習とされたようである。それは国会図書館に所蔵されている「第三回轉地游泳彙書(いしょ)」(学習院輔仁会雑誌 第26號附録1893年(明26)発行)<sup>8)</sup>によって理解される。

この「第三回轉地游泳彙書」は游泳演習の報告書であって、73頁にわたる活版印刷の製本である。冒頭に「本年相州片瀬に於て施行せし本院學生轉地游泳演習は凡そ前年の轍(てつ)に準(なぞら)ひ七月二十二日より八月十一日



写真4 第三回轉地游泳彙書(国会図書館所蔵)

に至る三週日間を以て終了せり今其出張の各官よりの報告を一括し例に依り之を第三回轉地游泳彙書と題し輔仁會雜誌に掲(かか)けしむ 明治二十六年十月 學習院」(下線筆者以下同じ)とあつて各担当の教官・職員による報告が詳細に記載されている。

冒頭の詞書に続いて學生監柳生房義報告書があり「相州川口村字片瀬に轉地游泳を施行せられしより 今回を以て其第三回となす故に諸般の事項前二回に於て概(おおむ)ね其基礎を形つくれるを以て凡(すべ)て前回の例を追ひ只時日の短縮より生ずる變化を補全するを諮(はかり)尚前回不好果と認むる廉(かど)を取捨折衷し彼是(かれこれ)美果を結はしめんと鞠窮(きつきゅう)微力を盡(つく)さゞりしにあらすと雖(いえ)とも未(いま)た十全の域に達するとを得さりしは慚懼(ざんく)の至りなり左に項を分ちて諸般の景況を報告す」(下線筆者)と書かれており、この演習の内容は概ね前 2 回の例に倣(なら)つて実施したことが強調されている。

## 7. 「第三回轉地游泳彙書」の内容

この彙書の學生監柳生房義報告書によるとこの年の参加者は 15 才以上の青年學生 77 名、15 才以下の幼年學生 78 名、職員等 17 名、その他(游泳助手、用務員、調理夫等)27 名の計 199 名である。前年までは 4 週間であった日程をこの年度からは 3 週間に短縮して行っており、游泳については天候に左右されることもあるので日曜日も休業なしに実施したようである。

宿舎は片瀬の龍口寺、常立寺を主とし、教官、醫官は富川平右衛門別邸を借用しているが、「先例を鑑(かんが)みて(宿舎を)配當したり ※( )内筆者」とあつて、ここでも例年と同様であることが述べられている。

学生たちの生活時間は次のようになっている。

午前六時	朝飯
同七時より八時半まで	學課
正午	晝飯
零時三十分より二時間	游泳
午後三時より六時まで	入浴
同六時	晩食
同八時	就寢

學課というのは英語・漢文・數學のことで、それぞれの学科の教授、助教授が指導に当たっている。

游泳については泳力、学年等によってグループが分けられ、各組に応じた泳法を教授し、進級テストを行い終了証を与えるなど、個人の進歩や努力が評価される仕組みが整えられている。

また、上記の時間以外は散歩や遊戯(川で小舟を漕ぐなど)をして自由に過ごしており、学生のための酒保(売店)も準備された。

このような日々の演習に加えて、近傍跋涉(きんぼうばっしょう)というプログラムが準備され、鎌倉探舊(たんきゅう)、横須賀造船所縦覧、箱根行、富士登山なども実施されている。中でも横須賀行、箱根行、富士登山は游泳演習の終了した八月十一日に各教官に引率されて実施されており、「八月十一日横須賀富士山箱根等へ旅行の職員學生は皆藤澤發第一列車に乗組む為午前六時頃舎營地を出發せり其地(ママ)直行歸京の學生は午食後宿舎を去り午後一時五十八分藤澤發車に乗り新橋に着解散を告げて各自家に歸らしめたり」<sup>8)</sup>-<sup>①</sup>とあるように希望者のみが参加するフリーチョイスプログラムであったことが分かる。ちなみにこの年の游泳参加者 155 名のうち 7 月 28 日に実施された鎌倉行へは 23 名、8 月 11 日に実施された 3 つのプログラムには箱根行

(2泊3日) 19名、横須賀造船所縦覧(日帰り) 15名、富士登山(2泊3日) 27名が参加している。

以上のような第三回轉地游泳彙書の記述からこの游泳演習はまさに「組織キャンプ」と言ってよいものと判断される。すなわち、組織キャンプの定義「十分に準備され計画されたプログラム」「野外でのグループ活動や共同生活」「楽しく創造的かつ教育的な体験の機会や場」「キャンパーの成長に寄与する指導者と自然環境資源」等のすべての要件がみごとに満たされているからである。

## 8. 日本における「組織キャンプ」の萌芽

学習院の游泳演習(夏季水泳演習)は1880年(明13)に始められたのではあるが、現在のところその内容についての詳細な資料等を見いだせていない。従って本稿では1891年(明24)7月より実施された学習院の「轉地游泳演習」に日本における組織キャンプの萌芽があったとすることとしたい。

## 9. 補遺

(乃木院長時代の游泳演習と

ボーイスカウトのキャンプとの関連について)

尚、従来乃木院長時代に片瀬海岸で行われた学習院の游泳演習を「スカウト式臨界キャンプ」と称する説<sup>12)</sup><sup>14)</sup>もあるがこれはいくつかの思い違いによって伝えられたものであろう。

ボーイスカウトとの出会い等について、乃木は英国より帰国して3週間後の1911年(明44)9月13日に「学生を正堂に集めて英國視察談を試みらる。教職員も居合せたる分は多く列席せり、当日は主としてボーイスカウトの談話なりき」<sup>9)</sup><sup>②</sup>とあるように講演を行っており、その大要が「乃木院長記念録」

に約7頁にわたって記されている。この講話によると「ボーイスカウトの仕事は中々興味のあるものだが、紀律が厳粛で下手な軍隊の運動を見て居るよりも気が利いて居た」<sup>9)</sup><sup>③</sup>などと語っていることからボーイスカウトの活動に大きな刺激を受けたことが伺える。そして、その講演を聴いた当時学習院中学1年生であった三島通陽(ボーイスカウト日本連盟初代理事長)は後年「回想の乃木希典」を著わし「乃木さんはその昔、英国にボーイ・スカウトが出来ると同時に、そのことを書物や写真で知って大いに興味を持ち、前にもものべたように、そのキャンピングの話をきいたりして、学習院で中等科、高等科の学生にやらせ(初等科は舎當)指導者となって、体あたりで指導した。こと一九一一年(明治四十四年)には、乃木さんは英国国王の戴冠式に、明治天皇の御名代として出席された東伏見宮の随員として、東郷大将と共にロンドンに行った。そのとき心の友であるキッチン元帥の案内で、ベーデンパウエル(ボーイ・スカウトの創始者)と逢い、そのキャンプやラリー(集会の事)を見物して、すっかり魅了された。それで帰ってからも、私達によくその話をしたものだ」<sup>13)</sup>と書いた。

更に「日本ボーイスカウト運動史」には「当時、学習院の夏期遊泳(ママ)は相州(神奈川県)片瀬海岸において、3棟の寮舎を青年寮、少年寮、幼年寮とわけて学生を収容し行なわれていた。帰朝後、乃木院長は、青年たちに片瀬海岸の松林で3週間の天幕生活をさせたのである。これはおそらく、乃木院長がイギリスのボーイスカウトの訓練に魅せられた結果であろう」<sup>18)</sup>との記述がある。しかし、時系列を整理していくとこれらの記述には多少の思い違いがあるようである。

すなわち、乃木がベーデン・パウエルの著

わした「スカウティング・フォー・ボーイズ」に接することが出来たのはそれが出版された1908年(明41)以降のことであり、実際にベーデン・パウエルと会うことが出来たのは英国国王の戴冠式に出席した1911年(明44)のことである。そしてこの時に初めてボーイスカウトの訓練を実際に見たのであった。

しかし、乃木が初めて片瀬海岸で游泳演習に参加したのは1907年(明40)7月21日<sup>9)</sup>・<sup>4)</sup>であり、これは「第17回轉地游泳演習」に当たる。そしてベーデン・パウエルがブラウンシー島で初めてキャンプを行ったのは同じ年の7月29日～8月9日<sup>17)</sup>である。わずか8日間ほどではあるが乃木の游泳演習の方が早く始まっており、「スカウト式」といってあたかも乃木がベーデン・パウエルのキャンプを参考にしたかのような理解は不合理である。このことについては師岡も「キャンプ白書 2016年版」のコラム<sup>16)</sup>によって同様の指摘をしている。

従って上述の三島の回想や「日本ボーイスカウト運動史」の記述には矛盾があると言える。これは乃木の講演を聞いたり片瀬海岸での率先垂範の様子を直に接して感銘(影響)を受けた人々が後年になって、その前後の出来事を混同して語り伝えたことによると思われるが、どうであろうか。

## 引用・参考文献

- 1) American Camping Association (2012) Basic Camping Management 第8版 p. 21
- 2) 東岩美(1943) 乃木大将の教育精神 文松堂出版
- 3) 学習院(1928) 開校五十年記念 学習院史 ①p. 257 ②p. 259 ③p. 238-239
- 4) 学習院(1981) 学習院百年史 ①p. 190

- ②p. 583 ③p. 582 ④p. 582 ⑤p. 695 ⑥p. 271
- 5) 学習院(2012) 学習院広報 88 特集 沼津 游泳場 100年
- 6) 学習院 游泳要用書類
- 7) 学習院(1906) 學習院一覽(自明治三十八年九月 至明治三十九年八月) p. 65-69
- 8) 学習院輔仁会(1893) 第三回轉地游泳彙書(学習院輔仁会雑誌第26號附録) ① p. 24
- 9) 学習院輔仁会(1924) 乃木院長記念録 ①p. 350-351 ②p. 71 ③p. 73 ④p. 9
- 10) 服部他助(1916) 恩師乃木院長 民友社
- 11) 黒木勇吉(1978) 乃木希典 講談社 p. 604
- 12) 松田 稔 (1978) ザ・キャンプ その理論と実際 創元社 p. 19
- 13) 三島通陽(1966) 回想の乃木希典 雪華社 p. 84
- 14) (公社)日本キャンプ協会(2014) キャンプディレクター必携 ①p. 64 ②p. 2
- 15) (社)日本キャンプ協会(2010) キャンプディレクター必携 p. 10
- 16) (公社)日本キャンプ協会(2016) キャンプ白書 2016 p. 26
- 17) 田中治彦(1995) ボーイスカウト 中央公論社 p. 33
- 18) 財)ボーイスカウト日本連盟(1973) 日本ボーイスカウト運動史 p. 37

参考年表

學習院游泳演習と関連事項

西暦	和暦	出来事	院長	就任月
1877	明治10	學習院開校	立花 種恭	10月就任
78	11			
79	12			
80	13	隅田川で夏期游泳演習始まる		
81	14			
82	15	游泳演習中止(疫病流行のため)		
83	16			
84	17		谷 干城	5月就任 12月退任
85	18		大鳥 圭介	4月就任
86	19	游泳演習中止(疫病流行のため)		7月退任
87	20		三浦 梧樓	11月就任
88	21			
89	22			
90	23			
91	24	演習場を片瀬海岸に移す 小堀流泳法を採用 片瀬移転趣意書 ①	岩倉 具定	3月退任
92	25	皇太子(大正天皇)片瀬學習院游泳所行啓(8/4)【官報第2747號】 ②		3月就任 10月退任
93	26	第3回轉地游泳彙書提出 ③	田中 光顯	10月就任
94	27	④		
95	28	⑤	近衛 篤磨	3月退任
96	29	⑥		3月就任
97	30	⑦		
98	31	⑧		
99	32	⑨		
1900	33	⑩		
1	34	⑪		
2	35	江ノ電開業(藤澤一片瀬間) ⑫		
3	36	⑬		
4	37	片瀬中年寮完成 ⑭		菊池 大麓
5	38	幼年寮及び他の施設落成 轉地游泳演習規程制定 ⑮	山口鋭之助	1月就任
6	39	⑯		1月退任
7	40	第17回游泳演習(乃木初参加)(7/21~8/4) 游泳演習規程改訂 テント設営 ⑰ B.P. ブラウンシー島でキャンプ実施(7/29~8/9)	乃木 希典	1月就任
8	41	B.P. 「Scouting for boys」出版 ⑱		
9	42	⑲		
10	43	學習院学期制変更(4月始まりに) 江ノ電(全線開通) ⑳		
11	44	乃木 英国王戴冠式参列・パウエル隊見学(4/12~8/28) ㉑ 帰国後學 習院でボーイスカウトの談話(9/13)	大迫 尚敏	9月退任
12	45(大1)	演習場を沼津に移すも明治天皇崩御のため游泳演習中止 乃木自決		11月就任
13	2	新轉地游泳規程制定 沼津で游泳演習再開		
14	3			
15	4			

\*①~⑫は片瀬海岸で行われた游泳演習の回数

\*江ノ電の開通により片瀬・江ノ島への観光客が増えたことが沼津移転のきっかけとなったか



# 實踐報告



## 留学生・外国人を対象とした野外教育・宿泊研修の注意点 —東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科の事例をもとに—

三宅祐司(東京福祉大学)

Yuji MIYAKE

### 1. はじめに

近年、日本国内で外国人を目にすることはもはや日常になった。

在留外国人数は増加を続け、2018 年末には、273 万 1,093 人<sup>8)</sup>で、2017 年末に比べ 16 万 9,245 人(6.6%)増加となり過去最高を記録した。在留外国人数は大阪市の人口 272 万 7,136 人(2018 年 12 月 1 日)<sup>1)</sup>よりも多い。在留外国人の増加は教育現場にも影響し、外国籍や外国にルーツを持つ児童生徒も増えた。2016 年度における日本語指導が必要な児童生徒数は 4 万 3,947 人<sup>10)</sup>である。また、訪日外国人は、2018 年には約 3,119 万人<sup>7)</sup>であり、初めて 3,000 万人を突破した。政府は 2020 年には訪日外国人 4,000 万人を目標に掲げている。

外国人の増加は日本のいたるところで顕在化しており、近年、野外教育の場にも報告が見られる。日本キャンプ協会会報誌『CAMPING』から例を紹介したい。中坪(2019)は、ネパール人女子学生 12 名を対象としたキャンプ<sup>6)</sup>について報告している。また、國吉(2019)は、大阪市立信太山青少年野外活動センターの「だれにでもやさしい施設づくり」の取り組みの一環として、客室案内に外国人にわかりやすい「やさしい日本語」<sup>3)</sup>を取り入れたことを報告している。

今後、野外教育の場においても留学生・外国人の参加が増えると考え、野外教育の指導者、各教育団体の指導者の一助になればと考え、本稿を執筆した。なお、本稿は筆者らが 2019 年 6 月 8 日に第 23 回キャンプミーティングで行った口頭発表、および、筆者が所属する東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科での実践と経験、学生へのアンケート結果を基にしている。

### 2. 活動概要

留学生別科とは、準備教育として日本語を学ぶ教育機関のことであり、学生は全て留学生である。2019 年 6 月 30 日現在、東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科は、960 名の留学生が在籍しており、国籍は 14 カ国に及ぶ。名古屋キャンパスでは 2 年次の学生を対象として 2012 年度より、群馬県の赤城山で 2 泊 3 日の宿泊研修を行っている。参加学生は 1 団につき 80 人前後で、年度によるが 4 団から 7 団で行っている。また、長野県の富士見台高原、愛知県の稲武や知多半島の美浜では日帰りの校外研修を行っている。

名古屋キャンパスが赤城山で行う宿泊研修の基本的な流れは以下の通りである。なお、日帰り研修のスケジュールについては場所により異なるので省略する。

研修 1 日目

9:00	東京福祉大学名古屋キャンパス出発
15:00	東京福祉大学伊勢崎キャンパス見学
18:00	東京福祉大学赤城山研修センター到着
19:00	夕食
20:00	リーダー会議・入浴
22:00	就寝

研修 2 日目

6:30	起床
7:00	朝の集い・朝食
9:00	ハイキング出発 (雨天時は室内でレクリエーション)
13:30	ハイキング帰着・昼食
14:30	自由時間 (希望者は文化体験等)
17:00	夕食
18:00	キャンプファイアー (雨天時はキャンドルファイアー)
20:00	リーダー会議・入浴
22:00	就寝

研修 3 日目

6:30	起床
7:00	朝の集い・朝食
8:00	清掃
9:00	東京福祉大学赤城山研修センター出発
16:30	東京福祉大学名古屋キャンパス帰着

2-1. 目的

研修は以下の3点を目的として行っている。

- ① 集団宿泊研修を通して、教職員と学生、信頼関係を構築し、国際交流をする。
- ② 野外活動を通じて日本の自然・地理・文化について学ぶ。
- ③ 入浴、食事など、日本のマナーやルールを学ぶ。

2-2. 留学生に野外教育を行う意義

留学生や在留外国人の中には、積極的に日本人や他の国出身の者に話しかけ、日本の社会に溶け込み友人関係を築き、楽しみながら生活している者が多くいる。

一方で、日本にいながらも同国人の中だけで生活している者が多くいる。<sup>5)</sup>

一般的に留学生が来日以降に所属するコミュニティは多くない。学校とアルバイト先、同国人同士の友人グループである。

学校での授業は、国籍に関係なく一緒に受けるものの、学生同士の交流には限界がある。不完全な日本語で他の国の学生と話すよりは、母国語で同国人と話す方がよほど楽である。国境を越えて友人関係を築くには、一定程度以上の言語能力とコミュニケーション能力が必要であり、外向的な性格も重要になる。

在留外国人が増えたことにより、日本の中でありながらも同国人同士のコミュニティの中だけで生活することも可能になってきている。例えば、同国人同士の部屋に住み、同国人の紹介でアルバイト先を探す。アルバイト先にもほぼ同国人だけしかおらず、日本語を話す必要のない場合もある。留学生だからといって、全員が国際交流をしている、あるいは望んでいるわけではないのが現状である。

そのような中で野外に出て視野を広げ普段ではできない体験をすること、教職員と学生が食事やハイキング・宿泊を伴うさまざまな活動をするには大きな意義がある。野外活動の体験を通して、日本の地理や自然、マナーやルールは生きた知識として学ぶことができる。また、何よりも教職員と学生が互いの交流を密にして、信頼感を深め、国籍を超えて共通の思い出を作るよい機会となる。

### 3. 国による経験のギャップ

日本人のみのグループを引率する場合、個人差はあるものの、文化や言語に特別な配慮をする必要はない。多国籍の留学生・外国人を引率する難しさは、それぞれの習慣・文化・言語・宗教の異なることである。野外活動や運動の経験、受けてきた教育内容も異なる。

留学生が母国の学校活動の中でどのような経験があるのかを、インタビュー調査を行い国ごとにまとめた(表 1)。ただし、実際には公立学校と私立学校の違い、地域や年代によって同じ国の中でも一様ではないので注意されたい。

特に、修学旅行・宿泊研修の有無に注目したい。多くの国では宿泊を伴うような活動は行っていないことがわかる。多くの留学生にとっては、教育活動としてクラスメイトと宿泊をすることや、学年を一つの単位として集団で行動することは、初めてか、まれなことであり、慣れていないのである。この点を踏まえたうえで、集団行動の重要性や、ただの旅行ではなく教育目的のある研修として行っていることを事前によく説明し、遅刻等で全体に迷惑をかけたり、はめをはずしたりする者が出ないようにしたい。

事前指導が大切ということは日本人の学生であれ、留学生であれ全く変わらないことである。事前指導に際して、留学生から、遅刻や飲酒などのルールが厳しすぎる、自分の国と違うという意見がしばしば出る。筆者らは、多国籍で集団行動を行う以上はルールが必要であり、日本にいるからには日本のルールで行うということを強調して指導を行っている。また、あくまでも教育の一環として野外活動・宿泊研修をすると説明することも重要である。

項目を一つずつ見ていきたい。まず、給食

であるが、日本の小中学校の多くの場合、自分たちで協力して配膳し、そろって食事をし、片づけをする。一方で、このような給食の経験がない留学生もいる。給食の経験がないということは、多人数での食事の経験が少ないということである。当該国の留学生は食事の配膳や野外炊爨において、人数を考えて食材を取り分けることや、一斉に配膳・片付けという認識がないため、自分の食事だけ準備し一人で食べ始め、周りが食べ終わっていないのに片付けることがある。

次に、運動会の有無である。日本では多くの学校で、学年で集団のダンスなどの出し物をしているが、インタビューではスポーツの競技会のような形で行われている国が多い。

また、学校での水泳の経験のない国が多いことから、留学生を対象に海や川でのアクティビティを行う場合は一層の注意をされたい。これは、泳ぎの経験が少ないという問題と、初めての体験で楽しくなり興奮しすぎて、話を聞かないという問題からである。筆者の経験から言えば、特にネパールやウズベキスタンなど、海のない内陸国の留学生を海に引率した際、急に海に向かって駆け出すことがあった。

国による部活・クラブ活動の有無から、体力や運動経験に差が出るかと思われるが、実際には国の違いよりも個人差が大きい。

表 1. 学校活動に関するインタビュー結果

	修学旅行 宿泊研修	給食	遠足	運動会	水泳	部活 クラブ活動
中国	×	△	○	○	△	×
ベトナム	×	△	×	△	×	×
フィリピン	×	○	△	△	△	△
ネパール	×	×	○	○	△	×
台湾	△	○	○	○	△	△
アメリカ	×	△	○	○	×	△
ミャンマー	×	×	△	×	×	×
バングラ デシュ	△	×	○	○	×	△

○あり ×なし △公立私立の違い等で学校による

## 4. コミュニケーション

### 4-1. 「やさしい日本語」

留学生と話をする際にどの言語を用いるべきだろうか。英語だろうか。筆者は基本的には「やさしい日本語」を用いることが有効的であると考えている。

「やさしい日本語」は、1995年の阪神・淡路大震災で、被災した外国人の言語が多様で、情報伝達が困難であったことから考案されたもので、文の構造・語彙を平易にし、外国人にも分かりやすくした日本語である。1で述べたように、大阪市立信太山青少年野外活動センターでも採用されている。

留学生を含む在留外国人の場合、普段、英語よりも日本語を使用している者が多い。国立国語研究所(2009)が在留外国人を対象に行った調査では、日常生活で困らない言語として日本語と回答した在留外国人は61.7%であるのに対して、英語と回答した在留外国人は36.2%であった。<sup>8)</sup> また、英語でコミュニケーションを取った場合、英語が理解できる者とできない者、英語母語話者と非母語話者の間に不公平感と情報のギャップが生まれる可能性も否定できない。

「やさしい日本語」は観光目的の訪日外国人にも実際に使用されている。加藤(2017)は、観光接触場面における言語使用状況を研究し、観光リソースとしての日本語の役割を説いている<sup>2)</sup>。

### 4-2. 情報伝達の注意点

実際の情報伝達の場面では、音声に加えて板書や身振りやイラストを使って伝達する。板書ははっきりと、必要な情報だけを書く。身振りなどの非言語コミュニケーションは文化によって意味の捉え方が異なることを留意されたい。イラストなども有効ではある

が、意図していない理解をされてしまう可能性があるので多用はしない。本田ら(2017)は、標識などの公共サイン上のピクトグラムや英語併記が、かえって外国人に誤解を招く可能性がある<sup>9)</sup>と述べている。

表情や顔色、姿勢をよく見ることも重要である。筆者の経験上、体調不良などの問題を語学力不足のため表現できず、黙っている者がしばしばいる。

引率者の姿勢として大切なのは、一度口頭で伝えただけでは情報伝達は不十分であると認識することである。そのために、何回も話すことや、口頭だけではなく文字・身振り・イラストも使えるものは全て使うこと、途中で質問を交えながら理解度を確認することが重要である。情報の受け手のことを考えながら、伝えたいことと伝わったことのギャップをなくす努力をされたい。

## 5. 食事に関する注意点

食事はもっとも気を使うことの一つである。しかし、端的に言えば、参加者全員に受け入れられるメニューはない。食事は国や民族によって嗜好が全く異なる。例えば、ある年の研修で一般的な日本のカレーライスを出したところ、ベトナム人はほぼ全員口に合わず、食べられなかった。筆者は、食事の際にさまざまな国の留学生から日本の味付けが甘すぎると言われたことがある。加えて、宗教上の配慮も必要である。

年度により多少異なるが、食事の一例として、筆者らが行う宿泊研修の2日目の夕食を紹介する。

- ・白米
- ・味噌汁
- ・鶏の照り焼き
- ・野菜炒め

- ・果物
- ・ゼリー 等

食事は、留学生が自分たちで取り分け・配膳・片づけをする。3 で述べたように、集団での食事・配膳に慣れていない者が多いため、食事前も配膳中も教員が配膳方法を指示している。また、箸がうまく使えない者もいるため、スプーンとフォークも用意している。

肉は、牛肉と豚肉は除き、鶏肉と魚のみを提供している。牛肉はインドやネパールなどのヒンドゥー教徒や、かつて日本がそうであったように農耕民族の一部にとってタブーである。豚肉は、バングラデシュなどのイスラム教徒やユダヤ教徒にとってタブーである。内陸国の出身者は、日本人よりも魚介類の生臭さに敏感であるので注意がいる。また、留学生によっては、ひき肉料理やフライ料理などは、原材料が分からないため手を付けないこともある。食事を楽しんでもらうためには、原材料が分かるように表示し、前もってメニューを知らせておくことが必要である。肉に関して言えば、多くの国の留学生を引率して野外でのバーベキュー等を行う場合、参加者に対する事前調査が重要となる。

また、冷たい料理もなるべく提供しない。ある年に、冷やし中華と冷やしうどんを出したところ、多くの留学生が食べなれておらず、ほとんど残してしまった。宿泊研修の2日目の昼食として弁当を提供しているが、冷たいという理由で苦手な者が多い。アンケート結果では、43.3%が冷たい食事に対してネガティブ評価であった<sup>注1)</sup>。冷たい食事は苦手な者が一定数いるが、ハイキング等の弁当として他の案がないのも現状である。

メニュー以外にも、マナーや食文化に注意したい。3 で述べたように、集団での飲食の経験が少ない者もいる。全員で協力して配

膳・片付けができるように指導しなければならない。「いただきます」や「ごちそうさまでした」などのあいさつもマナーであり、日本の文化である。また、食事は日本の料理や食材、箸の使い方を覚えるよい機会になる。

## 6. アクティビティに関する注意点

### 6-1. ハイキング・山登り

3 で述べたように、留学生によって集団行動の経験が異なる。集団で列になって歩くという経験がないものも少なくない。引率者の立場としてはハイキング・山登りの際に、隊列を組んで集団が広がらないようにしたいが、事前指導がなければ難しい。筆者らは野外活動以外の校外学習で引率する際も、移動時は列になり乱れないよう指導している。

列が乱れる原因は体力の差と、写真撮影である。体力に自信のある男子学生が速く進み、普段運動をしない女子学生が遅れがちになる。特に、ネパールなどの山の多い地方出身の男子留学生は足が速い。一方で、同じネパール人でも女子学生は体力のない者が少なくない。この点について、ネパール人の学生に聞いたところ、「ネパールの山は本当に危ないので、女子はあまり山に入らない。」という回答があった。写真撮影については、全体の動きを見て、集団を乱さないように指導している。集団を意識し、行動することで、達成感とともに仲間との連帯感を高めるということを理解させたい。

個人差もあるが、環境教育に対する取り組みも国によって違う。植物の採取などを悪気なく行う者がいるので、事前に環境教育を行うなど、ミニマム・インパクトを心掛けたい。筆者らは、環境教育の一環として海岸のごみ拾いを行ったこともある。

## 6-2. キャンプファイアー

キャンプファイアーは全員で楽しいひと時を過ごし、よい思い出を作るのに最適なアクティビティである。キャンプファイアーで火を扱うという物理的な危険性ではなく、文化的・宗教的な注意点について述べる。

キャンプファイアーで、「火の神」や「火の子」によって点火を行う演出がある。この演出に、宗教性を感じられる可能性もある。服装にも配慮が必要である。筆者の経験では、「火の子」の衣装としてオレンジ色や白色の布を用意していたが、これらの色は国によって、囚人・僧侶・死者などを想起させるとして、拒否されたことが何回かある。ただ、キャンプファイアーの演出から宗教性を全て排除することは難しい。事前指導として、以前の写真や動画を見せて、問題がないか確認してから行っている。

一般的な日本でのキャンプファイアーでは、全員で歌を歌ったりダンスをしたりして親睦を深める。しかし、多国籍の留学生が全員知っている歌やダンスはない。歌やダンスを行う際は、事前に簡単なものを教えておくか、簡略化したものを行う。筆者は、異文化理解を目的として、各国の歌を披露させている。

また、一般的な日本でのキャンプファイアーでは、基本的にサークルを作って各プログラムを行う。この際、エールマスターの指示が悪いと、同国の友人同士で固まってしまうがちである。筆者がエールマスターを行う場合は、なるべく他国の者が隣になるようなゲームを取り入れている。

プログラムで言葉遊びに面白味があるようなものは行わない。日本語は留学生・外国人にとって外国語である。外国語のジョークや冗談は伝わらないと考えていい。

## 6-3. 文化体験

筆者は、文化体験として、浴衣の着付け・茶道体験・折り紙・風呂敷の紹介を行っている。アンケート結果では<sup>注2)</sup>、64.1%がポジティブ評価であった。実際の様子を見ると、国を問わず、女子学生に浴衣の着付けが人気である。

文化体験は準備・実施ともに時間も手間もかかるので、野外活動をメインとする場合は、あくまでも補助的なアクティビティとして捉えたほうがよい。また、文化体験は、それぞれの興味が違うので基本的に自由参加としている。

## 7. 宗教上の配慮

5にて食事に関する宗教上のタブーを、6にてキャンプファイアーでの宗教上の配慮を少し述べたが、宗教上の配慮は多岐に渡る。

例えば、入浴である。温泉や銭湯など、大浴場で多数で裸になって入浴することは日本の文化の一つである。温泉の文化や入浴のマナーを教えたいが、人前で肌をさらすことは心理的抵抗を感じる留学生も多くみられ、また、肌をさらすことが宗教上のタブーである場合もある。

また、お祈りなども配慮する必要がある。宗教によっては1日に数回のお祈りや、曜日ごとのお祈りがあり、それが欠かせない場合もある。かつて筆者が引率した際にも、ハイキング中にお祈りが始まり、帰りのロープウェイに遅れそうになったり、他の宗教の留学生が先に出発しようとしたりしたことがあった。

筆者らは円滑に引率するために、事前にアンケートや個別の聞き取りをして、食事・入浴・お祈りなどについて、可能なことと不可能なことを、参加の見合わせも含めて調査し



ている。例えば、ハイキングの時間とお祈りの時間が重なる場合は、お祈りの時間や短縮の可否などを相談している。

宗教を国によって判断してはいけない。例えば、イスラム教が多数を占める国であっても、他の宗教の者もいる。必ず事前に個々に確認しなければならない。宗教上の事柄は非常にセンシティブなものである。ここに述べたことは宗教上の配慮の一部に過ぎないので、各自適切な文献を当たられたい。

## 8. おわりに

本稿では、留学生・外国人を対象とした野外活動・宿泊研修の各注意点、その理由と対策について述べた。野外活動は体験を通して、社会性や環境教育・チャレンジ精神を養うことのできる取り組みである。筆者は、その体験を留学生教育にも広めたいと考えている。

留学生・外国人を対象とした野外活動・宿泊研修を行う場合、事前指導が非常に重要である。これは、日本人を対象であっても同様であるが、留学生・外国人は、それぞれの文化背景・経験にギャップがあり、それぞれの母語が違う。引率者が当然と思うことでも、彼らにとっては初めてのことであるかもしれない。引率者は、彼らの多様性を認め、言動を受容した上で、あらゆる努力と工夫を惜しまず、ギャップや言語の違いを越えてコミュニケーションをしなければならない。

今後、野外活動・宿泊研修を経ての留学生の異文化理解や、国際交流に関する意識の変化を明らかにしたいと考えている。これらの課題に対しては、すでにアンケート調査をしているので、今後まとめて発表したいと考えている。

注1) 2019年度実施、昼食に関する自由記述での振り返りアンケート結果。有効回答数53名。23名(43.3%)が冷たい麺類や冷たい弁当について「おいしくない」「食べられない」「体が冷える」等のネガティブ評価。

注2) 2019年度実施、文化体験に関する自由記述での振り返りアンケート結果。有効回答数53名。34名(64.1%)が文化体験について「楽しかった」「またやりたい」等のポジティブ評価。

## 引用文献

- 1) 大阪市 推計人口（毎月1日現在）・人口異動  
<https://www.city.osaka.lg.jp/toshikeikaku/page/0000014987.html>  
 (2019年8月27日閲覧)
- 2) 加藤好崇(2017)観光接触場面のツーリスト・トーク研究-観光先進国に向けた新たなオモテナシの生成-、東海大学紀要国際教育センター紀要、東海大学国際教育センター、7号、1-22
- 3) 國吉啓介(2019)キャンプおじゃマップ第25回「だれにでもやさしい施設」を目指して、CAMPING、日本キャンプ協会、189、10
- 4) 国立国語研究所(2009)生活のための日本語：全国調査<速報版>  
[https://www.ninjal.ac.jp/archives/nihongo-syllabus/research/pdf/seika\\_sokuhou.pdf](https://www.ninjal.ac.jp/archives/nihongo-syllabus/research/pdf/seika_sokuhou.pdf)  
 (2019年8月27日閲覧)
- 5) 駒井美智子(2010)日本における外国人コミュニティの形成と負のスパイラル、東京福祉大学・大学院紀要、東京福祉大学、1(1)、49-54

- 6) 中坪禎夫(2019)キャンプおじゃマップ第24 回里美野外活動センターでの留学生キャンプ、CAMPING、(公社)日本キャンプ協会、188、10
- 7) 日本政府観光局 月別・年別統計データ(訪日外国人・出国日本人)  
[https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor\\_trends/](https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/)  
(2019年8月27日閲覧)
- 8) 法務省 平成30年末現在における在留外国人数について  
[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00081.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00081.html)  
(2019年8月27日閲覧)
- 9) 本田弘之・岩田一成・倉林秀男(2016)街の公共サインを点検する - 外国人にはどう見えるか、大修館書店、29-42
- 10) 文部科学省 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査  
<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400305&tstat=000001016761&cyc1e=0&tclass1=000001102915>  
(2019年8月27日閲覧)

#### 参考文献

- 1) 庵功雄(2016)やさしい日本語—多文化共生社会へ、岩波新書
- 2) 栗原久(2012)人々を楽しませる赤城山の魅力1. 地形の概要と山頂における植生の特徴、東京福祉大学・大学院紀要、東京福祉大学、2(2)、197-204
- 3) 加藤好崇(2019)「やさしい日本語」で観光客を迎えよう、大修館書店
- 4) 日本キャンプ協会指導者養成委員会(2008)キャンプ指導者入門、(社)日本キャンプ協会

**デイキャンプ実習に参加した C 大学保育・幼児教育専攻学生の  
生きる力の変容  
—先行研究(2泊3日)との比較による成果と課題の分析—  
The IKIRU CHIKARA(Zest for living) of students majoring in childcare  
after day camping  
- Results and challenges in comparison with previous studies -**

古田康生(岐阜協立大学) 山本孔一(環太平洋大学)

Yasuo FURUTA, Koichi YAMAMOTO

#### 研究目的

平成 14 年、文部科学省は、幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書<sup>14)</sup> (Ⅱ幼稚園教員の養成・採用・現職の各段階における課題と展望、1 養成段階における課題と展望)の、「(2) 教員志望者自身の多様な体験・得意分野の素地の形成」において、『少子化や都市化など社会の様々な変化もあいまって、柔軟性やたくましさを備えた教員になるために必要と考えられる、自らの生活体験や自然体験、社会奉仕体験などが不足している者も、教員志望者の中には、見受けられる。学生の自主的活動などを奨励し、多様な体験を得る機会を増やすことが望ましい。』と指摘している。つまり、幼稚園や保育園などで、幼児の豊かな自然体験活動を支えられる幼稚園教諭と保育士(以下、保育者とする)を養成するため、保育者を養成する大学や短期大学の段階で、保育者を志望する学生、つまり保育学生が豊かな自然体験活動を積むことを求めている。

これまでに、保育者志望の学生を対象とした自然体験活動・野外教育活動に関する研究報告は幾つかある。加藤と堀<sup>9)</sup>は、「今日の幼児教育は、「生きる力の基礎」を育成することが求められ、それは、基本的な生活習慣、人への愛情、自然の感受性、豊かな創造性とし、野外教育活動により期待される成果と重なると考え、保育者を目指す学生を対象に野外教育を実践している。その結果、野外活動に対するイメージが、「自然とのふれあい・楽しさ」、「協力・共同・満足感」など実体験を伴う具体的なイメージへと変容したと報告している。この「生きる力の基礎」は、1996 年第 15 期中央教育審議会「21 世紀を展望したわが国の教育のあり方について」第一答申で初めて「生きる力」の概念が定義され<sup>12)</sup>、「生きる力」は知・徳・体のバランスの取れた全人的な力とされている<sup>15)</sup>。その「生きる力の基礎」は幼稚園教育要領<sup>13)</sup>にも明記されている。

菊池と野田<sup>11)</sup>は、保育学生を対象に、日帰

りキャンプ実習により、自然に対する意識が変容したと報告している。石沢と佐藤<sup>7)</sup>は、ボランティアとして子どものキャンプに参加した保育学生は、その後、体験を通して自信をつけ、社会的スキルを向上させた、と報告している。

市河ら<sup>4) 5)</sup>は、保育学生のキャンプ実習参加による社会的スキルや生きる力に及ぼす影響を調査した一連の研究により、保育学生の生きる力は、キャンプ実習前に比べて実習後に有意な向上が認められ、キャンプ実習が保育専攻学生の生きる力の向上に良い影響をもたらしたと報告している<sup>5)</sup>。合わせて、保育者養成する立場から、幼児に自然に触れる体験を通して感動を与え、それを共有していく保育者は、自身が豊かな自然体験の経験を積み、豊かな感性を身に付けなければならない。しかし、現在の保育者を志す学生の幼児期には、既に携帯ゲームやTVゲームが普及<sup>3) 19)</sup>しており、その経験が乏しいのではないかと言及し、豊かな実体験を経験させる重要性を説いている。

野外活動教育における「生きる力」の変容に関する研究は、橘ら<sup>16)</sup>による「生きる力を構成する指標」の研究報告が起点と考えられる。その後、小・中学生<sup>17)</sup>や大学生<sup>5) 8) 18)</sup>を対象に、その指標を用いて野外活動の有益性が検討され報告され、多様な年齢にて有効な尺度であると考えられている。

橘と平野<sup>17)</sup>が考案した「生きる力」の指標は、つまり、「IKR評価用紙」は、3つの上位能力の「心理社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」から構成され、下位能力は、「心理社会的能力」が、「非依存」「積極性」「明朗性」「交友・協調」「現実肯定」「視野・判断」「適応行動」の7つの能力、「徳育的能力」は、「自己規制」「自然への関心」「まじめ勤

勉」「思いやり」の4つの能力、そして「身体的能力」は、「日常的行動力」「身体的耐性」「野外技能・生活」の3つの能力にて構成されている。

この「IKR評価用紙」<sup>16)</sup>(IKR:IKiRuchikara)を用いて、橘と平野<sup>17)</sup>は、小・中学生を対象に実施したキャンプにて生きる力を調査したところ、環境条件やプログラムの差異から生じる変化について報告している<sup>17)</sup>。すなわち、「生きる力」を伸ばすキャンプとそうでないキャンプがあると示している。つまり、プログラム内容と就寝場所、食事の提供方法、天候など、キャンプにおける生活環境が、「生きる力」の変容に影響すると報告している。

A県U市にあるC大学短期大学部人間発達学科では、これまで保育学生を対象に「キャンプ実習」を継続的に実施し、2018年度の実習では、「生きる力」<sup>12)</sup>に焦点をあて、特に、「心理社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の3つの能力が実習を通して変容が得られるかを実証的に検証しようと計画した。しかし、2018年7月に連続して発生した大型の台風により、2泊3日の実習が、デイキャンプに短縮せざるを得なくなった。

そこで本研究では、今回のデイキャンプ実習に参加した保育学生の「生きる力」への効果を検証するため、既に報告されている保育学生を対象に実施された2泊3日のキャンプ実習の「生きる力」に関する先行研究結果<sup>5)</sup>と比較検討することで、成果と今後の課題を明らかにしようと試みた。

## 方法

### 1. 調査対象

調査対象は、A県U市の保育者養成施設であるC大学短期大学部人間発達学科に在籍する2年次保育学生44名とした(年齢:19.39

±0.79 歳、全て女子学生)。全ての対象学生は、平成 30 年度 C 大学短期大学部キャンプ実習を履修した学生である。なお、このキャンプ実習の履修学生には、健康スポーツ専攻学生と介護専攻学生の 13 名が含まれているが、本研究では、保育学生の「デイキャンプ実習」と「宿泊を伴うキャンプ実習」後の「生きる力」の比較検討を目的としたため、分析の対象から除外した。

## 2. 調査項目及び手順

### 2-1. 調査項目

#### 2-1-1. 生きる力

本研究では、保育学生の「生きる力」を調査するため、市河ら<sup>5)</sup>の方法を用いた。すなわち、子どもの「生きる力」を測定するために橘と平野<sup>16)</sup>が開発した 70 項目からなる「IKR 評定用紙」の調査項目を基に、国立青少年教育振興機構が簡便にアンケート調査を実施できるように 28 項目に絞り込んだ「IKR 評定用紙 (簡易版)」<sup>2)</sup>を保育学生の「生きる力」の調査で使用しており、本研究でも同様に使用した。

「IKR 評定用紙 (簡易版)」(以下、「IKR 評定用紙」とする)は、3 つの上位能力、つまり「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」により構成されている。その下位能力は、「心理的社会的能力」が、「非依存」「積極性」「明朗性」「交友・協調」「現実肯定」「視野・判断」「適応行動」の 7 つの能力、「徳育的能力」は、「自己規制」「自然への関心」「まじめ勤勉」「思いやり」の 4 つの能力、そして「身体的能力」は、「日常的行動力」「身体的耐性」「野外技能・生活」の 3 つの能力にて構成されている。つまり、「生きる力」は 14 の下位能力により構成され、実際の調査では、各下位能力が 2 つの質問により調査される。

1 から 28 の質問項目に対して、6 段階評定で回答し、「とてもよくあてはまる」は 6 点、「よくあてはまる」は 5 点、「あてはまる」は 4 点、「あまりあてはまらない」は 3 点、「あてはまらない」は 2 点、「全く当てはまらない」は 1 点で回答させた。28 項目の総和を「生きる力」として分析した。3 つの上位能力と 14 の下位能力についても、小計値を算出し、それぞれの能力値とした。

### 2-1-2. 自由記述の質問項目：

「実習で得たモノ」と「実習で充実した時間」デイキャンプ実習を通して、具体的に「得たモノ」と充実して過ごせた「時間」を自由記述させた。記述された項目は、カテゴリー分類し、上位概念を抽出した。

### 2-2. 調査手順

調査は、実習後に実施した「ふりかえり」の時間にて実施した。調査主旨を説明した後用紙を配布して回答させた。回答後は、その場にて回収し、回収率は 100%であった。

## 3. 比較対照とした先行研究

キャンプ実習を経験した保育学生を対象に「IKR 評定用紙」を用いて「生きる力」の変容を報告した代表的な研究の一つに市河ら<sup>5)</sup>の報告(以下、市河らの研究とする)がある。本研究では、デイキャンプ実習後の「IKR 評定用紙」を用いて得た「生きる力」の評定値を検討するため、市河らの研究で報告された評定値を対照値として用いた。

## 4. キャンプ実習の概要

### 4-1. キャンプ実習概要

本研究で対象としたキャンプ実習は、C 大学短期大学部の「レクリエーション実習」を履

修する学生を対象に平成 30 年 7 月に 2 泊 3 日で実施が計画されていた。連続して発生した大型台風の接近により、実施期間を短縮せざるを得なくなり、「デイキャンプ実習」として開催した。実際、A 県は、この実習後、台風により甚大な被害を受けた。実習目的は、『レクリエーション・インストラクター資格取得の必修実習であり、野外活動におけるキャンピングの基本的な知識・技能を実践で修得する。また、企画段階から学生が主体となり、運営までを実施することにより、自己発達を促し、社会性を伸ばす』である。実習参加した履修学生は、保育学生（子ども教育専攻）が 44 名、健康スポーツ専攻学生が 8 名、介護専攻学生が 5 名であった。

#### 4-2. 指導体制

引率・担当教員は、C 大学短期大学部の専任教員 5 名が担当した。公益社団法人日本キャンプ協会公認指導者で、キャンプ全般に関する専門的な知識と技術を有し、長年の指導経験がある教員が、キャンプディレクター（キャンプ長）を務めた。その他には、救護の専門家が 2 名、野外炊事、テント設営、さ

まざまな自然体験活動を担当するプログラムマネージャー 2 名であった。

#### 4-3. 日程及びプログラム内容

平成 30 年度 C 大学短期大学部キャンプ実習の日程とプログラムは、図 1-1 に示す通りである。なお、本来であれば実施される予定だった「2018 年度キャンプ実習」のプログラム日程を参考として、図 1-2 に示した。

時刻	活動内容(2018.07.17.)
8:30	教員スタッフミーティング
8:45	学生リーダーズミーティング
9:00	参加学生集合・点呼(出欠確認)確認後報告
9:30	C 大学短期大学部を出発(バス)
10:00	キャンプ場到着 開校式・オリエンテーション
11:00	野外炊事 開始
13:00	野外炊事 終了・後片付け
14:00	さまざまな自然体験活動 「川遊び・沢遊び」など
16:00	活動終了・帰宅準備 閉校式
16:30	キャンプ場出発
17:00	C 大学短期大学部着・解散

図 1-1. 平成 30 年度 C 大学短期大学部キャンプ実習（デイキャンプ）日程表

時刻	活動内容(2018.07.17.)	時刻	活動内容(2018.07.18.)	時刻	活動内容(2018.07.19.)
8:30	教員スタッフミーティング	6:00	起床	6:00	起床
8:45	学生リーダーズミーティング	6:30	朝のつどい	6:30	朝のつどい
9:00	参加学生集合・点呼(出欠確認)確認後報告	7:00	朝食	7:00	朝食
9:30	C 大学短期大学部を出発(バス)	9:00	様々なアクティビティ フォトログイニング	8:00	テント撤収
10:00	キャンプ場到着	11:00	昼食準備	9:00	清掃活動
10:00	開校式・オリエンテーション テント設営	12:00	昼食	10:00	清掃点検
12:00	昼食(持参弁当) ピザ焼き講習会	13:00	様々なアクティビティ 「川遊びの達人になろう」	10:30	閉校式
13:00	様々なアクティビティ 野外レクリエーション 1	15:00	野外炊事 火おこし体験	10:40	キャンプ場出発
14:00	様々なアクティビティ 野外レクリエーション 2	19:00	夕食終了・後片付け	11:40	C 大学短期大学部着 後片づけ 備品確認
16:00	夕食コンテスト準備	20:00	入浴・就寝準備	12:00	解散
18:00	夕食コンテスト審査	21:00	班長会議		
19:00	夕食コンテスト終了 後片づけ	22:00	就寝		
20:00	入浴・就寝準備				
21:00	班長会議				
22:00	就寝				

図 1-2. 平成 30 年度 C 大学短期大学部キャンプ実習（2 泊 3 日）日程表

## 5. 分析方法

デイキャンプ実習後の「生きる力」は、28の質問項目の回答を6段階評定で得点化し、平均値±標準偏差で示した。市河らの研究との比較・分析では、表計算ソフト「エクセル」により、対応のないt検定を用いて平均値の差の検討をした<sup>1)</sup>。有意水準は、いずれも5%未満とした。なお、比較対照とした用いた市河らの研究<sup>5)</sup>の表示が全て小数点第1位までであったので本研究でも同様に示した。

## 6. 倫理的配慮

全ての調査の開始にあたり、調査対象者には、口頭にて及び調査用紙の文中にて、回答は成績には全く関係なく、結果の公表に当たっては、個人が特定されることはない、と説明した上で回答させた。

## 結果と考察

### 1. 「IKR 評定用紙」による「生きる力」

#### 1-1. 生きる力の総和

表1は、本研究で対象とした保育学生と市河らの研究により報告された評定値の総和を示した結果である。デイキャンプ実習後に「IKR 評定用紙」により調査した28項目からなる生きる力の総和の平均値と市河らの研究で得られた評定値の平均値には、統計的な有意差が認められた。

表1 実習後の生きる力 (IKR 評定用紙) の総和の比較

調査対象	人数	実習後のIKR評定用紙による「生きる力」の総和	
		平均値±標準偏差	
本研究対象者	44	116.4±2.0	
市河ら (2017) <sup>5)</sup>	41	129.5±1.1	
		p<0.05	

これまで、「IKR 評定用紙」を用いた研究の多くが、宿泊を伴う自然体験活動を通して、児童の「生きる力」に対して効果があると報告している<sup>6) 10) 17)</sup>。それは、大学生を対象

とした研究でも同様に報告されている<sup>5) 8) 18)</sup>。橋ら<sup>17)</sup>は、より厳しい条件下での実施の方が、生きる力の向上に効果がある、とし、克服的要素を含んだ活動プログラム、穏やかな天候よりも雨天などの悪天候、宿舎での宿泊よりも野外でのテント泊、提供食よりも野外での自炊が「生きる力」を高めるとしている。しかし、今回のデイキャンプ実習では、暑熱環境下での自然体験活動（川遊び）と自炊は実施できたが、テント泊はできなかった。そのため、市河らの研究の評定値と比較して「生きる力」の総和が低値を示したと考えられた。ただし、市河らの研究の評定値は、実習前の112.0±17.9点が実習後には、129.5±21.1点に有意に増加し、甲斐らの大学生を対象とした調査でも、実習前平均値は110.2点で、実習後平均値が、119.0点と有意に増加している。どちらの先行研究も、実習前の評定値の初期値が本研究の実習後の値と同程度であった。そのため、本研究の対象学生が計画通りにテント泊や複数回の野外炊事、種々の自然体験活動を経験できれば総和値が上昇する可能性があると考えられた。

#### 1-2. 3つの上位能力と14の下位能力

3つの上位能力、すなわち「心理社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の各能力別の小計値を市河らの研究と比較した結果が表2である。3つの上位能力の全てで、統計的な有意差が認められ、今回のデイキャンプ実習より、市河らの研究が報告した野外でのテント泊を伴うキャンプ実習の方が高値を示した。

表2 上位能力の先行研究との比較

上位能力	保育学生	市河ら(2017) <sup>5)</sup>	有意差
心理社会的能力	57.2 ± 10.8	63.2 ± 12.0	*
徳育的能力	35.5 ± 5.8	39.3 ± 5.5	**
身体的能力	23.3 ± 5.6	27.0 ± 5.3	**

\*\*p<0.01 \* p<0.05

次いで、上位能力を構成する14の下位能力について検討した結果が表3であり、同様に市河らの研究で得た評定値と比較した。心理的社会的能力の「非依存」「積極性」「明朗性」「交友・協調」の4項目に有意差が認められ、今回得られた評定値と市河らの研究で報告された評定値には、1.2から1.3ポイントの差であった。「現実肯定」「視野・判断」「適応・行動」の3項目では、有意な得点差はなく、得点差は0.8から0.1ポイントであった。徳育的能力の「自己規制」「自然への関心」「まじめ・勤勉」「思いやり」の4項目の全ての得点差に統計的な有意差が認められ、得点差は1.0から0.9ポイントであった。身体的能力の「日常的行動」と「野外生活・技術」に統計的な有意差が認められ、「身体的耐性」には、有意差はなかった。「日常的行動」では、市河らの研究の値と比べ1.5ポイント低い値を示した。

表3 保育学生のデイキャンプ後の IKR 評定の各項目得点

上位能力	下位能力	保育学生	市河ら(2017)	有意差
心理的社会的能力	非依存	8.0 ± 1.9	9.2 ± 2.0	**
	積極性	8.3 ± 1.9	9.4 ± 1.9	*
	明朗性	7.9 ± 2.3	9.2 ± 2.0	**
	交友・協調	7.8 ± 1.8	9.0 ± 2.2	**
	現実肯定	8.3 ± 1.9	9.0 ± 2.2	n.s.
	視野・判断	8.2 ± 1.7	8.6 ± 2.1	n.s.
徳育的能力	適応・行動	8.8 ± 1.5	8.9 ± 2.0	n.s.
	自己規制	8.3 ± 1.8	9.2 ± 1.8	*
	自然への関心	9.4 ± 1.6	10.3 ± 1.6	**
	まじめ・勤勉	9.1 ± 1.5	10.1 ± 1.5	**
身体的能力	思いやり	8.8 ± 1.7	9.8 ± 1.7	*
	日常的行動	7.2 ± 2.1	8.7 ± 2.4	**
	身体的耐性	8.2 ± 2.1	9.0 ± 2.3	n.s.
	野外生活・技術	8.3 ± 1.9	9.3 ± 1.7	*

\*\*: $p < 0.01$ , \*:  $p < 0.05$

### 1-3. 28の質問項目ごとの得点

「IKR評定用紙」による「生きる力」測定で用いる実際の質問項目ごとに回答された平

均値と標準偏差を表4に示した。統計的な有意差が認められ、今回得られた評定値が低値を示した項目は16項目あり、その得点差は0.4から0.8ポイントであった。得点差が最も大きかったのは、「誰にでも話しかけることができる」「早寝早起きである」「からだを動かしても疲れにくい」の3項目であった。

市河らの研究と有意差が認められなかった質問事項として、「現実肯定」「視野・判断」「適応・行動」「自己規制」「思いやり」「身体的耐性」「野外生活・技術」がある。これらは、市河らの研究の評定値においても5.0点以下の項目であり、有意な差とならなかったと考えられる。すなわち、期間が2泊3日程度の実習では変容を意識できるまでに至ってほしいと考えられ、今後保育学生を対象に「生きる力」を育てるキャンプ実習を計画するにあたり、実習期間や活動プログラムを計画する上で有益な資料となりえる結果であった。

表4 保育学生のデイキャンプ後の IKR 評定の各質問項目得点

上位能力	下位能力	調査項目	保育学生	先行研究(市河ら(2017))	有意差
心理的社会的能力	非依存	1.いやなことは、いやとはっきり言える	4.1 ± 1.2	4.6 ± 1.0	*
		8.小さな失敗をおそれない	4.0 ± 1.2	4.6 ± 1.1	*
	積極性	26.自分からすすんで何でもやる	4.0 ± 0.9	4.6 ± 1.0	**
		7.動物などに物事を考えられる	4.2 ± 1.2	4.8 ± 1.1	*
	明朗性	4.誰にでも話しかけることができる	3.9 ± 1.2	4.7 ± 1.1	**
		17.失敗しても立ち直るのがはやい	4.0 ± 1.3	4.7 ± 1.2	*
	交友・協調	28.多くの人に好かれている	3.5 ± 1.0	4.1 ± 1.2	*
		23.だれとでも仲よくできる	4.3 ± 1.0	4.9 ± 1.3	*
	現実肯定	24.自分のことが大好きである	3.5 ± 1.3	4.0 ± 1.3	n.s.
		15.誰にでも、挨拶ができる	4.7 ± 0.9	5.0 ± 1.0	n.s.
13.先を見通して、自分で計画が立てられる		3.9 ± 1.1	4.1 ± 1.3	n.s.	
3.自分で問題点や課題を見つけすることができる		4.3 ± 0.9	4.5 ± 1.1	n.s.	
適応・行動	6.人の話をきちんと聞くことができる	4.7 ± 0.8	4.4 ± 1.1	n.s.	
	9.その場でふさわしい行動ができる	4.1 ± 1.0	4.5 ± 1.0	n.s.	
自己規制	12.自分勝手な、わがままを言わない	4.2 ± 1.0	4.5 ± 0.9	n.s.	
	20.お金やモノのむだ使いをしない	4.1 ± 1.3	4.7 ± 1.2	*	
自然への関心	5.花や鳥などの美しいものに感動できる	4.7 ± 1.0	5.1 ± 0.9	n.s.	
	18.季節の気化を感じるができる	4.6 ± 0.8	5.2 ± 1.0	**	
	10.いやがらずに、よく聞く	4.4 ± 0.8	4.8 ± 1.0	*	
	27.自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	4.8 ± 0.9	5.3 ± 0.8	**	
思いやり	2.人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.7 ± 0.9	5.0 ± 0.9	n.s.	
	21.人の心の痛みがわかる	4.2 ± 1.0	4.8 ± 1.0	**	
身体的能力	19.早寝早起きである	3.6 ± 1.3	4.3 ± 1.5	*	
	11.からだを動かしても、疲れにくい	3.6 ± 1.2	4.4 ± 1.4	**	
身体的耐性	14.暑さや寒さに、負けない	4.1 ± 1.2	4.5 ± 1.2	n.s.	
	22.とても暑い/寒いを我慢して、がまんできる	4.1 ± 1.3	4.4 ± 1.2	n.s.	
野外生活・技術	16.ナイフ・缶などの刃物を、上手に使える	4.3 ± 1.1	4.7 ± 1.1	n.s.	
	25.洗濯機がなくても、手で洗濯できる	4.0 ± 1.2	4.7 ± 1.1	*	

\*\*: $p < 0.01$ , \*:  $p < 0.05$   
n.s.=有意差なし



## 2. 自由記述による回答結果

本研究では、デイキャンプに参加した保育学生の「生きる力」に影響したと考えられる「実習で充実した時間」と「実習で得たモノ」を自由記述により調査した。

「実習で充実した時間」(表5)では「川遊び」と「野外炊事・火おこし」が、それぞれ23件と20件あり、97.72%の学生がどちらかを記述していた。最も件数が多かった「川遊び」の具体的な記述内容は、「普段話さない人と仲良くなり、実習後も話せるようになった」「足を川につけるだけでも自然を楽しめた」「学科を超えて仲間が増えた」「きれいな水と暑熱環境下での涼の実感」「童心に戻り様々な水遊びができた」「班員との距離が縮まり積極的に話しかけ合えた」「川で生き物を見つけた」「川遊びの安全管理法が学べた」「自然の中で仲間と会話し、他の仲間が川で遊ぶ姿を観るだけでも楽しかった」「仲間の笑顔が見られた」「普段はしない川の中で散歩ができた」といった理由が記述され、自然の中での非日常体験や仲間との積極的な関りができたと伺えた。一方、2番目に多かった「野外炊事・火おこし」の具体的な理由の記述では、「事前に“火おこし”の知識は学習したが、実践では難しく、実体験が成長につながると理解できた」「仲間と協力して火が付いた瞬間の達成感を共有した」「自分で炊いたご飯は美味しい」「火でご飯を炊く非日常体験ができた」「火が付くか、ご飯が炊けるかの不安と完成時の達成感」「考えながら試行錯誤して火おこしをした」「一から作った感動体験ができた」「役割が果たせた」「飯盒で炊いた熱いご飯でおにぎりを作り、皆がおいしいと食べてくれた」「協力すると火が付き、チームワークの実体験ができた」といった内容が記述され、火おこしと飯盒炊爨の困

難に直面したが、仲間と協力して作り上げた達成感が伺える内容の記述があった。2つの記述内容に共通する事項の一つに「仲間との関わり」があり、自由記述では、「積極的な声掛けや会話」を挙げる保育学生が多かった。しかし、「IKR評定用紙」の結果では、「誰にでも話しかけることができる」が市河らの研究での値に比べ有意に低値を示し、回答には反映されなかった。なお、いずれの記述内容も肯定的な記述と読み取れるもののみで、否定的な回答はなかった。

表5 実習で充実した時間

活動名	件数
川遊び	23
野外炊事・火おこし	20
自由時間	1
移動時間	1
	45

表6 保育学生がキャンプ実習で得たモノ

カテゴリ	記述事項	件数
キャンプスキル	火おこし・野外炊事	14
	計画・準備・段取り	9
	時間配分	3
	自然を楽しむ	3
	お金の管理	2
	情報共有	1
	テント設営	1
精神面	協調性・協力(集団生活)	15
	役割・俯瞰・全体視	3
	行動力	3
	思いやり・共感	2
	自信	2
仲間	仲間	5
	計	63

これらの内容から、本キャンプ実習の目的である「主体性」や「社会性」が達成できた

と考えられる。また、野外教育活動の一般的な目的でもある「自然と関り、自然と向き合う」や「仲間と向き合う」、困難克服場面を通して「自分と向き合う」といった目的も達成できたと考えられる結果を得た。

本研究では、デイキャンプを経験した保育学生の「生きる力」を「IKR評定用紙」を用いて調査したが、市河らの研究が報告している宿泊を伴うキャンプ経験をした保育学生の評定値レベルには至らなかった。しかし、自由記述内容を分析すると、「生きる力」を構成する「新たな仲間との関り」や「課題克服」「自然体験活動」といった諸経験が肯定的に捉えられていた。このことから、宿泊を伴うキャンプ実習が経験できれば、「生きる力」の向上が期待できると考えた。

#### まとめ

本研究の結果から、デイキャンプの経験だけでは、宿泊を伴い種々の自然体験活動ができた保育学生の「生きる力」評定値に至らず、その客観的な有効性は示されなかった。しかし、この結果は今回のデイキャンプ実習や、デイキャンプそのものを否定するものではない。「IKR評定用紙」を用いて「生きる力」の変容を自己評価したところ、デイキャンプという日帰りキャンプでは意識変容に至るまでの十分な刺激が至らなかった可能性があるだけである。すなわち、「生きる力」の変容を目的に「キャンプ実習」を計画するのであれば、宿泊を伴う組織キャンプで、テント泊や野外炊事といった課題克服型プログラムを準備した方が、効果があるのではないかと考える。ただし、自由記述の内容からは、本研究での調査対象学生においても、宿泊型キャンプ実習の経験により、「生きる力」が変容する可能性が期待でき、その実証のためにも今後の追加調査が必要である。

#### 参考文献

- 1) 出村慎一・小林秀紹・山次俊介 (2001) パラメトリック検定・平均に関する検定、出村慎一 (編)、Excel による健康・スポーツ科学のためのデータ解析入門、大修館書店、102-105
- 2) 独立行政法人国立青少年振興機構 (2010) 体験活動による「生きる力」の変容が見える！・事業評価に使える！「生きる力」の測定・分析ツール  
[http://www.niye.go.jp/kenkyu\\_houkoku/contents/detail/i/69/](http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/69/) (平成 30 年 9 月 20 日アクセス)
- 3) 服部伸一・足立正・嶋崎博嗣・三宅孝昭 (2004) テレビ視聴時間の長短が幼児の生活習慣に及ぼす影響、小児保健研究、63 (5)、516-523
- 4) 市河勉・三宅孝昭・新戸信之 (2013) キャンプ体験が保育専攻学生の社会的スキルに及ぼす影響について、松山東雲短期大学研究論集、43、5-61
- 5) 市河勉・新戸信之・三浦累美・三宅孝昭 (2018) 自然体験活動が保育専攻学生の生きる力に及ぼす影響-「キャンプ実習」からの検討-、松山東雲短期大学研究論集、48、138-150
- 6) 井之口茉里恵・哇浩二 (2014) 兵庫県自然学校の児童の生きる力に及ぼす影響の評価-西宮市立 H 小学校の分析を通して-、大阪教育大学紀要第IV部門教育科学 62 (2)、155-165
- 7) 石沢順子・佐藤豊 (2005) 子どもキャンプにおけるカウンセラー経験が保育者養成校の学生に及ぼす影響について、日本体育学会大会予稿集、56 (0)、341
- 8) 甲斐知彦・佐藤博信・林直也 (2006) キャンプ集中授業における学生授業評価～生

- きる力評定用紙を用いた評価～、関西学院大学スポーツ科学・健康科学研究、9、13-17
- 9) 加藤渡・堀義幸 (2005) 保育者を目指す学生への野外教育、一宮女子短期大学紀要、44、59-66
- 10) 神田亮・佐藤健 (2012) 児童の組織キャンプにおけるMHPC尺度とIKR尺度の変容、別府大学短期大学部紀要、31、125-131
- 11) 菊池理恵・野田さとみ (2016) 保育者養成校における野外活動実習の効果について、名古屋柳城短期大学研究紀要、38、185-190
- 12) 文部省(現、文部科学省) (1996) 審議会答申等、21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申)、  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm) (2018年9月21日アクセス)
- 13) 文部科学省 (2008) 平成20年3月幼稚園教育要領、チャイルド社、9-25
- 14) 文部科学省 (2009) 教員志望者自身の多様な体験・得意分野の素地の形成、幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書、  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm)  
(平成30年9月19日 アクセス)
- 15) 文部科学省 (2011) 幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領改訂のポイント、  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1234773\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1234773_001.pdf)  
(2018年9月18日アクセス)
- 16) 橘直隆・平野吉直 (2001) 生きる力を構成する指標、野外教育研究、4(2)、11-16
- 17) 橘直隆・平野吉直・関根章文 (2003) 長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響、野外教育研究、6(2)、45-56
- 18) 橘直隆・蓬田高正・土方圭 (2003) 野外運動の授業が学生の生きる力に及ぼす影響、大学体躯研究、25、19-29
- 19) 土谷みち子 (2001) 子どもとメディア:乳児期早期からのテレビ・ビデオ接触の問題点と臨床的保育活動の有効性(〈テーマ〉21世紀の家族と子ども)、国立女性教育会館研究紀要、5、35-46



## 高校サッカー一部新入生を対象とした組織キャンプの実践 ーチームビルディングを目的とした

### Action Socialization Experience の導入ー

高橋宏斗(大阪体育大学大学院) 伊原久美子(大阪体育大学)  
矢野達也(大阪体育大学大学院) 今村樹(大阪体育大学体育学部)

Hiroto TAKAHASHI, Kumiko IHARA,  
Tatsuya YANO, Tatsuki IMAMURA

キーワード：チームビルディング、ASE、組織キャンプ、高校運動部

#### 1. はじめに

Action Socialization Experience (以下、ASE と略す)とは、一人では解決できないような肉体的・精神的課題に対し、メンバー一人一人がそれぞれの能力を出しあい、協力しあいながらグループで課題を解決していくアクティビティであり(布目、1989)、イニシアティブゲームとも呼ばれる。現在、ASE は企業の新人社員研修や、大学のフレッシュマンキャンプ、プロスポーツ選手やコーチなどを対象にアイスブレイクを目的としたものや、問題解決能力を養うチームビルディングの手法として用いられている。

スポーツ選手やコーチを対象としたチームビルディングとしてのASEの実践事例に着目すると、井村ら(1999)がサッカー指導者の集団の雰囲気向上、福富ら(2014)が中学生サッカーチームの集団の雰囲気向上、徳田ら(2018)が大学アメリカンフットボールクラブの集団凝集性の向上、伊原ら(2019)が大

学女子バスケットボール部の集団凝集性の向上を報告しており、ASE はチームビルディングの手法として効果的であることが報告されている。

実践報告や研究論文を概観すると、プログラム序盤にASEを取り入れたキャンプや、チームビルディングとして一日ASEを実践する事例は多く見受けられるが、2日以上ASEを行ったキャンプの事例は見受けられない。しかし、筆者は以前プロスポーツ選手を対象とし、チームビルディングを目的にASEを2日間実施するプログラムにスタッフとして参加したことがあり、その有効性を感じていた。

そこで本事例でも2日間の組織キャンプの中に、チームビルディングを目的としたASEを導入したプログラムを企画・実践した。本稿は、1年目の実施を経て、プログラム構成やスタッフのアプローチを修正した2年目の事例を中心に事例報告を行う。

## 2. 実施概要

### 2-1. 実施に至る経緯

対象となる高校サッカー部は、全国大会出場(県大会優勝)を目標とし、数年前から強化が始まった。そのため、入学前から練習に参加するいわゆる特待生と、入学後に練習に参加する一般生が混在する状況であった。

コーチによると、サッカーの上手な特待生が、技術面から一般生を見下しているような様子があり、一般生も壁を感じているように見受けられるとのことだった。そこでコーチから、「学年としての絆とカラーを生み出すこと」、「リーダーとなれる選手が1人でも多く現れること」を目的に、野外教育で用いられているチームビルディングの依頼がなされた。また、コーチは「困難に対してチーム全員、もしくは複数人で考え、意見を出し合い、解決に導く」体験を求めており、ASEを中心とした2日間のキャンプを提案し、実施に至った。

### 2-2. チームの様子とコーチへのヒアリング

実施前にコーチにチームの様子を尋ねたところ、昨年度にチームビルディングを行った現2年生は、特待生と一般生の垣根はなくなり、人数が多いにも関わらず仲の良い学年となった。また、3年生の引退後は、名実ともにチームの中心となり、エネルギーのある、リーダーの多い学年になったとのことだった。一方で、仲の良さが裏目に出てストイックさや競争意識が低く、全員が辞めずに仲良く活動することが大切であるといった雰囲気を感じられるとのことだった。そこで本年度は、プログラムの大枠は変えず、学年としての絆やカラーを生み出すことに加え、「競争意識が高く、チームとして高め合える関係性」になるためのきっかけを与えるプログラムを実施した。

### 2-3. キャンプの内容

2019年4月20日(土)から21日(日)の1泊2日、大阪府立少年自然の家にてA高校サッカー部新入生25名を対象に行った。プログラムを表1に示す。

指導は各グループにメインのキャンプカウンセラー1名、サブのキャンプカウンセラー1名がつき、ASE指導、野外炊事やテント設営などのキャンプ生活の指導を2日間通して行った。

メインキャンプカウンセラーはASE指導経験が比較的豊富な大学院生・学部4年生が務め、サブキャンプカウンセラーは大学2年生が務めた。いずれのカウンセラーも、日頃から野外活動や野外教育を学ぶ学生であった。

表1. キャンプのプログラム

1日目		活動内容
10:00		集合・開講式
		昼食
		ASE第1部
16:00		夕食づくり
		生活環境整備・テント設営
22:00		就寝
2日目		活動内容
5:00		起床・朝食・テント撤収
8:30		ASE第2部
		昼食
14:30		ASEファイナルチャレンジ
16:00		ふりかえり・閉講式

開講式では、まず参加者に「全国大会に出場するチームが持っている力は何か」を問いかけた。選手たちからは「意識が高い」や「団結力がある」と言った言葉が出てきた。そこであらかじめ設定した「質の高いコミュニケーションを身につける」という目標を意識するように動機付けを行った。質の高いコミュニケーションとは、前述の「高め合える関係性」に必要な要素であると考え、参加者には、ただ単に仲が良いことを指すのではなく、厳しいことや言いづらい事であっても、チームが強くなるために必要なことは伝え、それを聞き入れたり話し合うことができる状態を目指すことを伝えた。

1日目のASE第1部は、各グループのキャンプカウンセラーが、グループの様子をみながら実施するアクティビティを選択した。具体的には、始めは身体的・精神的負担が少なく、アイスブレイクの要素を含んだアクティビティを行い、徐々に難易度を上げる形で指導を行った。具体的なアクティビティは表2

に示す。

2日目のASE第2部は、あらかじめ設定した4つのアクティビティを各グループが全て挑戦できるようローテーションで実施し、ファイナルチャレンジはその4つのアクティビティのいずれかに再チャレンジする形を取った。詳細は3-2に示す。

表2. 実施アクティビティ一覧

アクティビティ名	内容	規則
人間知恵の輪	メンバーがお互いに向かい合い、①両隣以外の人と右手を繋ぐ②右手で繋いだ人以外と左手を繋ぎ、絡まりあった手を離さないで、一重の円にほどく。	1) 繋いだ手は離してはいけない。
ピサの斜塔	メンバーの足(つま先からかかと)を地面から隙間なく積み上げていき、指定された高さより高く積み上げる。	1) 足と足を離してはいけない。
ヘリウムフープ	メンバー全員の指の甲にフラフープを乗せ、メンバーの胸の高さから地面にフラフープを置く。	1) フラフープからメンバーの指を離してはいけない。
ブラインドスクエア	メンバー全員が目隠しをし、20mロープを用いて正方形を作る。ただし正方形の完成は角度90度、四辺の誤差5cm以内とする。	1) 移動する際はロープから手を離してはいけない。
パイプライン	班筒状のパイプを使ってビー玉などのボールを落とさずに目的地まで全員で運ぶ。	1) ビー玉が逆戻りしてはいけない。 2) ビー玉を持っているメンバーはその場から移動できない。
トローリー	ロープが付いている角材の上に全員乗り、ムカデ競争の要領で目的地まで移動する。	1) 身体の一部が地面に触れてはいけない。
ZOOM	関連性のある絵を1人1枚持ち、他者には見せないようにしながら絵の情報を伝え、順番通りに並べる。	1) 他人の絵を見てはいけない。
ラインナップ	地面から約20cmの高さの丸太もしくは幅20cm程度の板の上に全員が乗り、一列横隊になる。指定された順番(生年月日順や名前順の50音順等)に丸太もしくは板の上で地面に落ちずに並び変わる。	1) 立木につかまったり、地面に体の一部が触れてはいけない。
日本列島	メンバー全員でひとつのブロックや切り株の上に一斉に乗り込み10秒保持する。	1) 身体の一部が地面に触れてはいけない。
危険物処理班	ロープを用いて、円の中心にあるアイテムを円の外に倒さずに置く。	1) 円の中には入ってはいけない 2) 全員が必ずロープを持たなければならない。
くもの巣	立木と立木の間にくもの巣のようにロープとゴム紐で張り巡らされた枠をメンバー全員がくぐり抜け、反対側へ通過する。	1) 身体の一部がロープや立木に触れるてはいけない。 2) 一度通過した枠は他のメンバーは使うことができない。
インディジョーンズ	全員が台の上になり、板とロープを使い、離れた場所にある宝を取る。	1) 身体と板・ロープが地面に触れてはいけない
アイランド	約3m間隔で設置された3つの台(約1m四方、高さ約20cm)から落ちずに、長・短2つの板を用いて台を渡っていく。	1) 身体の一部と長・短の板が地面に触れてはいけない。
ビーム	立木と立木の間の高所に設置された丸太を全員が協力して反対側へ越えていく。	1) 丸太より下方の立ち木には触れてはならない。 2) 反対側へ越えていったメンバーは、丸太の下からこれから越えようとするメンバーの補助ができない。
エレクトリックフェンス	参加者の肩くらいの高さで立木の間に張られたロープをメンバー全員が触れることなく、板を使ってロープの外側へ越えていく。	1) 立木やロープに触れたり、ロープの下をくぐり抜けたりすることはできない。 2) 身体の一部が立木やロープに触れてはいけない。
バックフライング	メンバーの一人が一定の高さの場所に後ろ向きに立ち、そのままの姿勢で後ろ向きに倒れる。残りのメンバーは、受け止める体勢を作り、倒れてくるメンバーを必ず支えなければならない。倒れる人は一人ずつ交代していく。	1) 挑戦するか否かの判断はメンバー自身の判断に委ねる。

## 2-4. プログラム構成の特徴について

本事例の特徴として、2日間続けて ASE を行うことと、組織キャンプの中に ASE が入っていることが挙げられるだろう。

ASE は、ふりかえりなどの手法を用いて、体験学習サイクルを循環させながら指導を行う。参加者は、アクティビティを通して見えた個人やグループとしての課題、長所や短所をふりかえり、「何があった?」、「それはどうして?」、「じゃあどうする?」などを考えながらプログラムを行う。最終的にはアクティビティではなく「スポーツ場面」や「日常生活」に一般化し、アクティビティを通して感じたことをその場面に適用していくことが、重要である。チームビルディングとして行われる ASE だけのプログラムでは、プログラム中に ASE 以外の応用の場面はないが、本事例は組織キャンプの中に2日間の ASE があるため、ASE で感じたことを、野外炊事やテント設営など異なる場面で応用することが可能であった。また、野外炊事やテント設営で感じたことを ASE 場面に応用することも可能であった。

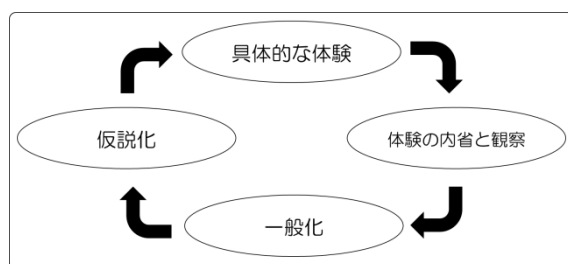


図 1. Kolb の体験学習モデル(林ら、2002)

また、キャンプ生活がプログラムの中にあることで、新チーム始動時に行うチームビルディングとしてもう1つの効果を感じることができた。それは、ASE のアクティビティでは消極的だった参加者が、ASE のふりかえりを経て、チームへの関わり方が変化したり、

炊事が得意な参加者が野外炊事でリーダーシップを発揮したりと、参加者の新たな一面が見えることである。これは場面が変わらない一日の ASE では難しいことであると考えられる。一日のみのプログラムでは、時間制限やグループの雰囲気などにより、なかなか自分の意見を言うことができないまま終わったり、コミュニケーションに対して苦手意識があればその一日を我慢してやり過ごしてしまうことも考えられる。しかし、その後のキャンプ生活があることで、ASE のアクティビティ中には出せなかった自分らしさが出る機会となり、スタッフも比較的長いスパンでのアプローチが可能になる。またチームのコーチもキャンプ生活での選手の様子を見ることで、より日常的な選手たちの雰囲気を感じることができると考えられる。

## 3. 昨年度の反省点と今年度の改良

前述のように、昨年度は特待生と一般生の垣根がなくなり、仲良くなるという成果が得られたが、ストイックさや競争意識が低いという反省点が報告された。そこで今年度は、競争意識が高く、チームとして高め合える関係になるためのきっかけを与える内容を取り入れた。

### 3-1. スタッフからのアプローチの改良

今回の事例では、ASE 以外の場面では「どれだけ参加者に任せられるか」を、スタッフのアプローチの1つのテーマとした。具体的には、前回は野外炊事の際、食材をグループごとに分配したが、今回は食材をまとめて置いておき、自分たちで分配する形をとった。またキャンプカウンセラーは「聞かれたこと以外は答えない、教えない」というスタンスを共有した。そのためキャンプカウンセラー



は、参加者の様子を見守りながら、普段のキャンプなら指示型のアプローチを行うところを、選手たちが気付くのを待つように民主型や放任型のアプローチを行った。アプローチは Situational Leadership(図 2)を参考にした。

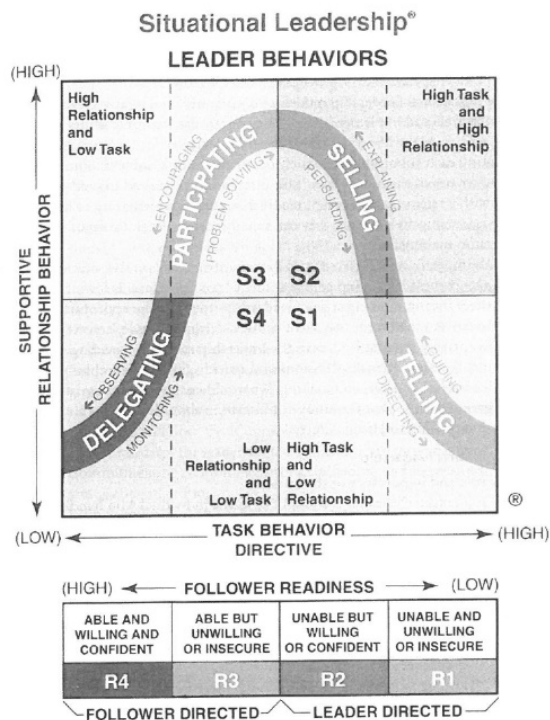


FIGURE 29.3. Situational Leadership® is a registered trademark of the Center for Leadership Studies, Inc. Copyright © 2002, Center for Leadership Studies, Inc. All rights reserved.

図 2. Situational Leadership(Jack 他、2005)



写真 1. 野外炊事の様子、スタッフは見守る

これにより、1つのグループが炊飯の水の量を間違えお米が上手く炊けない、夕食後の

片付けに時間がかかり集合時間に間に合わない、他のグループや集合時間を気にせず遊んでしまう、それを注意できない等いくつかの課題が表出し、これらの課題を参加者にフィードバックする機会となった。具体的には、分からないことを分からないままにすることのリスク、集団の中で感じている「何か違うかも」という違和感を解消するための働きかけについてふりかえった。これにより、より質の高いコミュニケーションを意識づける機会となった。

### 3-2. ASE 展開の改良

昨年は、キャンプの最終プログラムとして、3年間のチームへの関わり方を仲間に宣誓し、バックフライング(トラストフォール)を全員で行った。



写真 2. 昨年の最終チャレンジ、バックフライングの様子

今年度は、2日目の午前の ASE から、キャンプカウンセラーの判断でアクティビティを選ぶのではなく、難易度の高いアクティビティをローテーションで実施する形をとった。これはコーチからの「仲良しクラブではなく、チーム内に競争があることが当たり前」という意識をつけたというリクエストに応えるためであった。これにより、全グループが同じアクティビティにチャレンジし、他

のグループと成功数を競う形とした。実施した4つの課題と各グループの成果は表3に示す。

表3. ローテーションによる各班の結果  
(45分トライ、1回成功で10p)

	A班	B班	C班	D班	成功率
ビーム	0	30	0	0	25%
アイランド	10	10	10	10	100%
クモの巣	10	0	10	0	50%
ILクワイクワ	30	20	0	0	50%
合計点	50	60	20	10	

午後はファイナルチャレンジとして、参加者が「4つのアクティビティを、グループではなくチーム全体として達成するためには、どのグループがどのアクティビティにチャレンジすべきか」を話し合い決定する形を計画した。これは、選手たちの競争意識を高めるだけでなく、仲間意識や、チームとして成果を高めていくために行った。

### 3-3. グループの再編成と課題の再設定

本事例はコーチにグループの編成を任せしており、A班にはあまりしゃべらず、リーダーシップを取ることが苦手な選手を集めていた。リーダーシップを取る人がいない中で、選手たちがどのようにグループに関わるのを見るためであった。予想に反し、そのグループは2日目のローテーションでは他のグループを上回る成績を残していた(表3)。

2日目午前、ローテーションの実施も後半に差し掛かった頃、コーチから「このままのグループでもう一度チャレンジするよりも、もう少し高いレベルの課題が設定できないか」という提案があった。これは先述のA班の様子の変化や成績が大きな要因である。キャンプを通しておとなしかった選手たちが発言する機会が増えたことや、一般生で固

めたグループが他のグループを上回る成績を残したこともあり、このような提案に至った。

そこで、2日目午後のASEファイナルチャレンジでは、グループの再編成と課題の再設定を行った。グループの再編成は、グループ内での通し番号を基にランダムに再編成を行った。課題の再設定は、ビーム、エレクトリックフェンスは約20cm高さを上げ、アイランドは真ん中の島を、現地にあった小さいベンチに入れ替え、かつ若干の傾斜がつく形に変更した。くもの巣は課題の性質やそれまでのグループの成績から難易度の変更は行わなかった。



写真3. ファイナルチャレンジの最後のトライに集まる参加者達

参加者には「グループの再編成と課題の再設定により、アクティビティ達成の難易度が上がるが、みんなに求めているレベルはもっと高いため、どのような形式、どのような場面であっても結果を残していくことを求める」と伝えて実施した。

また「制限時間内に全グループがクリアすること」が成功の条件であることを示した。その結果、班同士で午前中の情報を共有したり、お互いにアドバイスするなど、各グループのパフォーマンスが向上した。また、課題を達成したグループが他のグループの場所

へ行き、アドバイスや応援を行った。最後に残ったクモの巣には全員が集結し、全グループがアクティビティを成功することができた。これらの展開により、仲間と競い合いながら、チームとして成果を高めていく関係性の理解や体験が得られたと考える。

#### 4. コーチからの評価

キャンプ直後のコーチからは、「仲間だけではなく自分自身のことにもさらに深く知ることができると感じる」、「チャレンジや約束に失敗したときに、または失敗しそうなときに素の部分が見えた。誰が乱れを正そうとしているかがはっきりした」、「客観的視点から観察することができ、今後のアプローチの方向性が明確になる」などのコメントがあった。

また、キャンプ 1 ヶ月後にコーチへチームの現状とキャンプの評価を求めたところ、キャンプに参加した 1 年生の 3 分の 2 程度の選手たちは、高い水準で高校生活に打ち込んでいるように見受けられること。残りの 3 分の 1 程度の選手は頑張っているものの自分のことで精一杯の様子であることが報告された。また、今のチームは、コーチが望んでいた環境になっているとのことだった。

#### 5. まとめ

ASEを中心とした2日間の組織キャンプは、場面の変化があり、ASE だけでは見られない参加者の一面を見ることができること、ASEでの体験がキャンプ生活に、キャンプ生活での体験がASEに応用されることなどの特徴があり、それらは新チーム始動時のチームビルディングとして有効であることが示唆された。キャンプのスタッフやキャンプカウンセラーが指導を行うことで、コーチが客観的にチームを見る機会にもなり、その場面が課題

に挑戦している場面だけではなく、日常生活に近い場面があることも有益であることが示唆された。今後も様々な形式で行われる野外教育におけるチームビルディングを通し、より有効なアプローチを考え続けたい。

#### 引用文献

- 1) 福富優・平野吉直 (2014) : ASE を取り入れたキャンプ活動がサッカーチームの雰囲気にも及ぼす影響, 独立行政法人国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター紀要, 3 : 57-68.
- 2) 林綾子・飯田稔(2002) アメリカにおける体験学習を取り入れた野外教育指導法について, 野外教育研究, 5(2) : 11-21.
- 3) 伊原久美子・村上なおみ・高橋宏斗 (2019) 大学女子バスケットボール部を対象とした Action Socialization Experiences プログラムが集団凝集性に及ぼす影響, 大阪体育大学紀要, 50:1-14.
- 4) 井村仁・飯田稔・田嶋幸三・関根章文(1999) JFA・S 級コーチ養成コースにおける ASE 活用に関する基礎的研究, 野外教育研究, 2(2) : 37-42.
- 5) Jack K Drury , Bruces. Bonny , Dene Berman , Mark C. Wagstaff (2005) Leadership, The Backcountry Classroom 2nd edition. 343-370.
- 6) 布目靖則(1989) イニシアティブゲーム. 日本野外教育研究会編キャンプテキスト, p. 127-133.
- 7) 徳田真彦・伊原久美子・加藤佑一・高橋宏斗・久田竜平・田淵洋勝・飯田輝(2018) 大学運動部に対する ASE プログラムが集団凝集性に及ぼす影響—新入生と在学生の比較から—, キャンプ研究, 21:15-29.



## 野外で『うまい飯を炊く』調理法の検討 —飯盒炊飯を負の歴史から考える—

倉品康夫(帝京大学講師／埼玉県キャンプ協会理事)

宮内麻里香(帝京大学) 柏木舞(帝京大学)

滝島慎(帝京大学) 露木拓実(帝京大学)

### うまい飯を食べるということ

『うまい飯を炊く』という技術は日本独特の主食調理法で日本人の叡智と永い経験とによって日本独自に発達してきたものである。この米炊飯技術は食の文化財と考えられる。この『うまい飯を炊く』、うまい飯を食べることは日本のキャンプのテーマでもある。このテーマについて考察する。

### こんがり狐色のお焦げに仕上げる

具体的なうまい飯の炊きあがりのイメージとは「底に水分を全く残さず、釜底の米粒が狐色にこんがりと色づくように炊く」「焦げるのではなく、淡く狐色に色づくことが、ご飯の美味さを引き出す」となる。茶道の茶飯釜の作法では、このこんがり狐色を「うす焦げ」と呼び重宝する。

それは「研ぎ、水分量、火加減、余計な水分の蒸気化、蒸らし及び焦がし」の手際の試行錯誤と勘及び決断力の練達に頼って成立し、炊き干し炊飯法と呼ばれる。

米の食べ方は民族的な食習慣で、それぞれに品種も炊き方も食べ方も異なるが、東アジアには焦げ飯を賞味する共通の食文化がある。

### 米食常食国民食と兵食

ところで、日本の歴史に於いて明治以降、国が富み、飛躍的に米飯の常食が普及する。その米食伸展に多大な影響を与えたのが、バラエティに富んだレシピ集『軍隊調理法』に則して調理される「帝国陸軍の食事」と考えられる。つまり、徴兵における多様な兵食体験により国民食が豊かになり、日本人の米食文化が進捗したと考えられる。勿論、米飯は加熱装置と釜、もしくはスチームで調理された。

ところが、残念なことに先の太平洋戦争の国難で 1941 年以降、一般市民は食糧不足に遭遇するが、その国難を乗り切るとして、帝国陸軍の食事は戦時の野戦でも出来る限り『軍隊調理法』に則り、後方で専門の兵隊が野戦炊具で調理し、飯盒で前線に配っていた。

### 飯盒の来歴

そもそも、飯盒の来歴とは…。帝国陸軍は義和団事件(1900年)に出兵して欧米軍隊と交流し、その後の装備や戦法に関して種々の示唆を与えられた。その際、帝国陸軍は飯盒という食器(メスキット)、個人配食用弁当箱に出合った。それまで帝国陸軍は柳で拵えた弁当入れを使用していた。

飯盒という弁当箱による炊飯は日常ではなく、あくまでも便宜的な方法であった。飯盒による飯盒「炊爨」の訓練もあったが、大抵は部隊から握飯と沢庵などが届けられていた。

ちなみに、現在のドイツ陸軍の伝統的メスキット（配食用飯盒）は帝国陸軍の飯盒とほぼ同じ格好である。兵式飯盒に炊飯用途としての工夫改良は殆ど見受けられず、寸分違わぬ姿かたちは100年以上前のコピーのままである。飯盒とは日本のオリジナルグッズという言説は全くの誤解である。

現在の自衛隊の飯盒の用途は配食用の弁当箱、メスキットである。

### 戦況劣勢化と飯盒炊飯

劣勢で通常の補給線が維持できなくなり「帝国陸軍の食事」も劣化した。「武士は食わねど、高楊枝」の精神論も限界となり、友軍内が弱肉強食化して、士気は低下し、規律が乱れた。

その末期的状況、負の局面に於いて、便宜的な炊飯手段として飯盒は活躍した。飢餓の惨状に至り、飯盒は命の糧を得るサバイバルキットとして、武器を捨てても絶対に手放せない神器として、多くの兵隊の命をつないだ。

前述のとおり、日本の炊飯方法は勘と試行錯誤から成り立つが、弁当箱での飯盒炊飯は圧倒的に不利である。しかし、諸般の事情から、職人的な、些末と思われる程の熟練度を必要とするノウハウ・工夫で美味しい飯に挑戦したと思われる。曰く、飯盒の蓋を上から棒でたたいて、その音の感じで飯の炊きあがりぐあいを判断するとか、火からはずした飯盒はゆっくりかえして、上向きになっている底をたたき、飯盒の飯をなかで逆転させてむらしをかけるとか、新聞紙で包むとか、木の枝

で音を聴くとか、様々な技法・工夫の伝承がある。負け戦の局面で破滅の予感を糊塗する矜持を感じる。

先の大戦末期の帝国陸軍の内務班における理不尽な私的制裁等、末期的愁嘆場がトラウマとして共有され、支配され戦後教育の宿痾となっている。

飯盒も帝国陸軍の負の歴史とすることはできないか。

炊具ではない飯盒で炊飯を経験することが自己目的化されていないか。

自然のなかでうまい飯を炊いて、米食の恵みを堪能して、多くの命、自然の恵みに思いを致すのが日本のキャンプの食事の目的で、その為の手段追求が指導者の役割りと考える。

### 長谷川純三の基調講演

#### 飯盒の負の歴史の払拭

2001年に岡山県で行われた文部科学省後援事業「全国野外活動指導者講習会」の基調講演において、当時の日本キャンプ協会副会長長谷川純三（元帝国陸軍将校）が「飯盒は兵隊の弁当箱で、飯盒炊爨とは一時的、代替的、便宜的な方便であって、飯盒でご飯を炊くのは不適當である」旨の発言をし、枝葉末節な指導に拘らない、正当的炊飯方法の検討を提言した。フロアは、かなり、この発言に抵抗した。

### コンクルージョン

こんがり狐色のお焦げに仕上げる望ましい炊飯方法を検討する実践報告

### 実験

#### 検証内容

#### 各容器における炊飯の到達目標

「底に水分を全く残さず、釜底の米粒が狐色

にこんがりとしぼくように炊く」「焦げるのではなく、淡く狐色にしぼくこと」への達成度を比較検討する

## 手順

### 各容器

- 1 ガラス蓋土鍋
- 2 茶飯釜（鉄器）
- 3 飯盒

で同条件で各一合炊飯した。

水は米の量の1.2倍とした。

水浸時間:1時間

### 使用火器

ホンマ製作所 ステンレス時計1型薪ストーブ（新品）で同条件の堅薪と竹の火力で炊飯した。

### 時間管理

最初にガラス蓋土鍋のガラス蓋でモニター観察して他の2つの時間を揃えた。

沸騰までの時間（武火）:10分

その後の弱火（文火）:15分

蒸らし:15分

### 実験結果 炊きあがり

#### 茶飯釜

一番「底に水分を全く残さず、釜底の米粒が狐色にしぼくとしぼくように炊く」ことができた。したがって、食味も良。もっとも理想に近い。うす焦げを剥けば釜を洗う必要がなかった。

#### ガラス蓋土鍋

焦げた匂いはしたが、満足な焦げができなかった。食味は普通。洗う手間は、水に漬けて米粒は落とせた。

#### 飯盒

焦げができず、食味は可。米粒が付着して洗うのに一番手間がかかった。

## 考察

炊飯とは表面から始まった糊化・アルファ化がお米の内部でも起こり始める。当然ながら水はどんどんお米に吸収されると共に水蒸気になって外に出て行く過程と考えられる。

茶飯釜は、丸い底のためきちんと対流が起きて、全ての米粒の中心まで、糊化させ、水分をさらに蒸発させることができる。強い火（武火）で炊き、底の部分がうす焦げを形成したサインである「香り」に対応して、やわらかい火（文火）に移行させ、やがて下ろす。釜の中のご飯を混ぜ返して、釜の底の焦げ及び水分、米粒芯部まで糊化しているか、をチェックして、蒸らしに移行か、再度、火にかけるか判断する。

土鍋は形状は茶飯釜と同様であるが、焦げ付いた場合の処置が大変でそれを恐れ過ぎた。また、今回、土鍋の熱伝導について、経験が不足していた。

飯盒では底が球体ではない為、対流が不十分で、底の角の部分に米粒が滞留して焦げだす。全ての米粒の中心まで糊化させつつ、底の角にこびり付いた米粒の焦げを炭化させない、と云う微妙な見極めと火加減の管理が求められる。

### 後始末を簡単にする工夫

炊飯とはベータ化しているでん粉をアルファ化・糊化させるというくらい、糊に近くベタベタさせる過程である。実験の飯盒のように糊化するのみだと、後始末が面倒くさい。

その解決手段は

1. うす焦げを形成させる

2. 麦を混ぜる
  3. 玄米を炊く
- 等が考えられる。

#### 1. うす焦げを形成させる

前述、茶道の茶飯釜の作法ではうす焦げを重視する。

茶懐石料理では焦げ湯を出す。焦げ湯とは釜の底に残った焦げ飯を無駄にすることなく使い、弱火できつね色に焦がし、熱湯をそそいで薄い塩味をつけたものである。即ち、残ったお焦げは水を加えて再度、煮れば、釜から剥がれるということである。

#### 2. 麦を混ぜる

麦を多くするほど米に由来する飯の粘り気が少なくなり、固い食感となる。麦は炊き上げるのに米よりも多くの水が必要のため、麦の量が増えるにしたがって米のみの場合よりも水を多めにする。帝国陸軍は胚芽米に麦を混ぜ、栄養素の欠点も補っている。

#### 3. 玄米を炊く

玄米はポロポロとして、釜肌にベタベタつかない。便通も改善される。しかし、それは消化吸収が良くないことを意味する。白米が兵糧米である所以である。

#### ベストの選択について

要するにベストの選択とは茶飯釜のような軽めの鉄器となる。南部鉄器との比較実験が必要となるが、南部鉄器はよく焦げつく。これは釜肌の違いと思われる。南部鉄器は厚すぎる。

#### 火の焚き方 -直火ではなく薪ストーブを

現在のキャンプサイトのかまどは、飯盒仕様になっている。底の丸い釜は置きにくい。この際、丸い組蓋の時計ストーブなどの薪ストーブを検討すべきと考える。

煙突のある薪ストーブを使い空気を薪の全面によく流通させるときは、煙は少なく勢いよく焰を上げ火力が強い。しかし、直火のキャンプ場のかまどの光景は空気の流通が不完全で、煙が多くて火力が弱い。前者を完全燃焼といい、後者を不完全燃焼と呼ぶ。つまり火の焚き方の要諦は空気の流通を良好にさせ完全燃焼をさせることにある。完全に燃焼させることは、その燃料の含む熱量を最も有効に使用していることになる。また薪も節約出来る。やはり、煙突による空気の吸い込みが重要で時計ストーブなどが有効である。

先の東北の災害時には火の粉が飛ばない時計ストーブが重宝された。

#### アルファ米開発の経緯と飯盒

アルファ米は現代の災害時及び野外活動に活用されている。

このアルファ米開発の経緯とは、1944年、帝国陸軍は飯盒炊飯の現状に危機感をいだき、飯盒炊飯に訣別しようと現在のアルファ米発売元の尾西食品に「炊飯を行わずに食べられるご飯」の開発要求をする。尾西食品は、でん粉化学者二国二郎博士と共同でアルファ米の製品化に着手し乾飯の製品化、量産化に成功した。

帝国陸軍が飯盒炊飯を否定したお陰で、我々は炊飯から解放され、他の活動に専念することができる。

#### 参考文献

- 1) 一ノ瀬俊也 (2014) 日本軍と日本兵 米



- 軍報告書は語る, 岩波書店.
- 2) 伊藤桂一 (2008) 兵隊たちの陸軍史, 新潮社, p 171.
  - 3) 川島四郎 (1982) たべもの心得帳, 新潮社, p 57.
  - 4) 川島四郎 (1984) 食糧発明物語—復刊・食糧研究余話一, p124, 東明社.
  - 5) 菊月俊之 (2006) 世界ミリメシを実食する—兵士の給食・レーション, ワールドムック, vol.612.
  - 6) 小林完太郎 (1982) 復刻 軍隊調理法—元祖男の料理, 講談社
  - 7) 小熊英二 (2015) 生きて帰ってきた男—ある日本兵の戦争と戦後, 岩波書店.
  - 8) 大塚力 (1982) 食における日本の近代化, 国連大学人間と社会の開発プログラム研究報告.
  - 9) 坂口 正治 (2013) 飯盒の歴史と機能について, ライフデザイン学研究, vol. 9, pp409-416
  - 10) 田名部尚子 (1991) ヒトの食生活史に関する考察—食生活論確立への提案—食生活総合研究会誌 Vol. 1 No. 1.
  - 11) 淡交社編集局 (2000) 茶飯釜の楽しみ—まぼろしの茶事、茶飯釜のさまざま, 淡交社.



## 地域研究：里山キャンプを考える

宮内麻里香(帝京大学) 柏木舞(帝京大学) 滝島慎(帝京大学)  
露木拓実(帝京大学) 倉品康夫(帝京大学講師／埼玉県キャンプ協会理事)

帝京大学の初級指導者資格認定キャンプは、奇蹟的に保全された東京の里山で田んぼをお借りして活動している。

今回、地域研究として里山キャンプの可能性について研究したので以下に報告する。

### 1. 里山とは

里山田んぼとは砂漠・高原・熱帯雨林では不可能と考えられ、日本列島に特徴的な水環境と四季の条件に由来する最も生物多様性を育むことが出来る、持続可能な二次的自然を保全する環境システムである。

里山には多様な自然が残っている。しかしその生態系は全くの自然ではなく、人の「ヒトの都合」と「生物の都合」を勘案して、手を加えた人工的自然、二次自然であるが、里山の風景は人間の自然の調和と多様性の一つの究極の目標点と考えられる。

### 2. 私たちの体験

私たちは6月に小野路町で実習を行った。

多摩センター駅からバスで10～15分ほど移動し、到着したのは東京とは思えない自然豊かな場所であった。高いビルなどあるはずもなく、見渡す限り山が広がっていた。どこか昔ながらの生活が伺えるような町であり、近代的な東京の生活とは真逆のようにも感じた。さっそく小野路の山の中に入ると、野

生のタヌキを目撃した。それ以外にも、ヘビ？やネズミの穴を見たり、普段は聞かないような鳥の鳴き声を聞いたりした。

桑の実を食べつつ、さらに奥へ進むと、借りた田んぼがあり、実習を行った。

小枝を拾い、竹を切って薪ストーブをつけた。薪ストーブの上でご飯を炊き、炒め物や煮込み料理を作った。水道の蛇口はないため、買って来たペットボトルの水や鶴見川源流として湧き出す泉を引いた水を利用して調理や食器洗いをを行った。

他にも、レンガを積み上げてかまどを作りピザを焼いたり、紐とブルーシートで雨避けテントを立てたりといった活動や、田植え作業、子どもたちとのふれあいなど、この場所でしかできない活動を行ってきた。

小野路宿里山交流館では、地元で採れた野菜や手作りのお菓子が並んでいた。スーパーではあまり見かけることのない山菜もあった。この交流館は休憩スペースがあり、地元の人との会話を楽しむ事ができる施設である。このような施設も、東京では珍しいのではないかと感じた。

### 3. 「田んぼ」について

田んぼを保全すると、いろんな生き物の賑わいが蘇る。啓蟄(3月5日前後)には里山中のヒキガエルが冬眠の穴から這い出てき

て小さな池に重なり合って産卵する。オタマジャクシが泳ぐようになれば、ママシの子どもが食べに来る。ドジョウが泳げば、田んぼには白鷺が舞い降りて食べる。多分、このサギは赤坂見附外堀の聖域的営巣地からこの聖域的田んぼに通ってくるらしい。

ヤゴを食べるアメリカザリガニは退治して、コイも居ないのでアキアカネやシオカラトンボ達は群舞して産卵する。ヤゴは蚊の幼生のボウフラが好物でヒトは多少は蚊に刺されないで済む。

これは里山の生態系におけるヒトと生物のギブアンドテイクの一例である。

町田市の調査によると、まとまった緑や多様な自然を有する環境に生息している動植物は、植物が約 37 種類・動物が約 61 種類とのものである。

多くの動植物が群生しているが、この生態系というのは食物連鎖のような弱肉強食の世界だけではなく、複雑に前述の相互依存のギブアンドテイクで関係しあっている場合もある。一方的な関係ではなくヒトを含む異種の生物が緊密な結びつきを保ちながら一緒に相互依存的に贈与の交換関係で生活しているともいえる。また、これはヒトが生物界の弱肉強食「一人勝ち」から多様性、バランス・中道・中庸を担保する保全行為と考えられる。そのバランスを顕著に崩し、持続可能性を阻害する種及び外来侵入種の動植物は排除する。

#### 4. 里山の森

そもそも、森の木々は太陽を奪い合って生きている。樹冠を広げて「ひとり勝ち」して、周りの木を日陰にして、元気をなくし、弱らせるという弱肉強食の世界である。落葉広葉樹は少しでも日を受けないと枯れてしまう。森林の遷移の過程では、光に対する要求性が

比較的低い陰樹が徐々に優占するようになっていく。

その論理に任せると代々木の明治神宮社叢（鎮守の杜）のような常緑樹の極相林となる。菌類レベルの種の豊富さが評価されているが景観性が乏しい、暗い森になる。ところが、明治神宮には、陰樹林の社叢と対照的な彦根藩邸跡を里山的に保全管理した泉水と巨木の屋敷林の極相状態の陽樹林部分がある。野鳥も集まり、景観の多様性がある。

やはり、薪炭林として薪や木炭に利用されなくなっても里山の健康を保つ為に管理人は必要とされる。日陰では生きていくのが苦手で樹冠を広げたい山桜を、里山の管理人は「桜は周りの木を枯らしてこまる」と切り倒す。勿論、常緑樹に対しても同じ態度である。クヌギやナラなどの落葉樹林、冬には葉を落とすタイプの木が作る森は夏は緑陰を、冬は陽だまりをプレゼントしてくれる。

この生態系は何度も云うが、本来の生態系ではない。里山環境とは水田や森林といった水陸両方の生態系が入り混じり、多様な動植物とヒトの「都合」を合わせて暮らす上ではほぼ完璧なシステムである。

動物たちもヒトもこのシステムに組み込まれ、ミミズは土を豊かにし、鳥や獣の糞は堆肥になり、ヒトは里山を見守る墓地に埋葬され、動物の遺骸と同様、里山に還る。

さて、現今、生物であれ、人間の社会であれ、生き残りの為には「多様性」の確保が喫緊の課題である。里山と田んぼを守るとは、生物多様性の恵沢をエンジョイ（享受）しつつ、日本の稲作文化継承を担保する自助的な活動と考えられる。

#### 5. 里山保全活動の必要性

ところが、この里山環境が現代に残っているのは偶然の重なり合い、奇跡であり、この

奇跡的聖域（サンクチュアリ）の自然に日常的にふれあえる稀有さに人々は気がつかない。

近年は里山を管理する人間の高齢化もあり、里山管理放棄、宅地開発等土地利用変更といった生物多様性損失の危機が顕在化している。それを食い止め、持続可能な社会の実現に向けた取組みは趣味やボランティアでは、解決しない。

「儲からないことはしない」という市場経済、経済行動大原則に即して里山の価値をあげなければ、当然の結果として、里山が廃れていくのは止められない。里山の価値を高め、その恵みを将来にわたって享受する方便として保全活動と収益事業を両立が必要と考える。

そこで以下に若者・キャンプ指導者及び観光学科学生として考えを述べる。

### 5-1. 若者・キャンプ指導者及び観光学科学生として考える

ここに地球環境問題が喫緊の課題であるとの認識する若者、キャンプ指導者及び観光学科学生として、以下に若者及び子どもを里山に誘致するキャンプ及び観光の提案をする。

- これらのコンセプトは以下のようである。
- ・金をかけずに頭を使った里山体験アイデア
- ・里山の味方を一人でも増やす

### 5-2. 里山入域の心得

里山は、多様な生きものからたくさんの「めぐみ」の中で過ごすというと、健康的で気持ちいいイメージがあると思われるが、里山は、リゾート、高原、清流、手つかずの自然ではない。夏季はイモリ、ヒキカエル、マムシ、ヤマカガシ、アオダイショウ、ネズミ、蚊、ブヨなど、との共存、田んぼで泥にまみ

れることも意味する。里山キャンプ活動、生物の観察、ハイキング、田んぼ活動には参加者への覚悟が求められる。里山キャンプのブランド化には「なんでこんなに変な虫や生き物がいるところに来ちゃったの…」という眩きを生まない参加者への覚悟、意識の枠組み周知が必要と思われる。

しかし、里山キャンプから生物多様性との関わりを一度でも、自らの五感で体感して理解するのは最高の環境教育及び自然体験である。

### 5-3. 里山キャンププログラム

以下に年齢ごとのプログラムを述べる。

#### 5-3-1. 里山子どもキャンププログラム

里山体験を中心としたプログラムである。

里山ハイク

田んぼ・田植え、イナゴ取り、稲刈り

餅つき

蛍狩り

木登り

野外炊事

里山ピザ作り

#### 5-3-2. 働く里山キャンププログラム

中途半端な遊びではなく、本気の労働が前提となる。コンセプトは、里山の仕事の大変さと楽しさの両方を知る。思い切り働いて、飲食交歓する。

田んぼ・田植え、草取り、イナゴ取り、稲刈り

竹林の整備

炭焼き（一本杉公園）

餅つき

里山ピザマラソン大会

#### 5-4. 里山観光について

地域経済観光の視点では、田んぼ里山の水環境保全活動は地域の景観や文化を生かしたエコツーリズムとして発信可能かもしれない。環境問題的に里山に観光客を入れるということには異論があると思われる。しかし、里山の価値を高めるための保全活動の前述「方便」と考えられる。アフリカ大陸で動物を保護する為にサファリツアーを企画すると同様な発想である。

夏季の里山、荒廃した里山ツアーは観光的にはグリーンではないブラックなツーリズムとなる。

##### 5-4-1. 里山の価値を高める訪日外国人旅行・インバウンドの誘致

外国人観光客が日本に来る目的は、観光庁による外国人観光客へ訪日目的のアンケート調査(2019)によると、1. 日本食 2. 買い物、3. 日本の四季、4. 繁華街の街歩き、5. 温泉であるが、2 度目以降の訪日時に行いたい活動として、「四季の体感（花見・紅葉・雪など）」「日本の歴史・伝統文化体験」、「日本の日常生活体験」などが挙がり、「モノ消費」から「コト消費＝体験型」へと訪日客の旅行スタイルが変化するという。和服や書道、陶芸などの伝統文化と比べて、ワイルドであるが里山ツアーを日本自然保全文化の体験とできないか？

##### 5-4-2. 飛騨サトヤマ・エクスペリエンスの事例

岐阜県飛騨市古川町には「サトヤマ・エクスペリエンス」という体験型のインバウンドの成功事例がある。サイクリング・古民家への宿泊・農作業体験などができるツアーで、参加者の7割が外国人。古川町は「地域の人々

とのふれあい」を謳い、見知らぬ土地を旅する観光客が求める地元の人々とのコミュニケーションと古川町の日本の原風景という強みと隣の高山市の集客力を掛け合わせて外国人観光客を増やすことに成功している。

##### 5-4-3. インバウンド都内小野路里山ツアープログラム

そこで、高尾山より都心に近いというメリットを生かし、コンセプトは地元との交流、日本の米の文化を実際に体験する事で日本文化を味わう、として以下のプログラムを検討する。

地元の交流館でのうどん打ち体験及び  
 うどん流し  
 小野路地域の畑の生垣のお茶の製茶体験  
 かまどでご飯を炊く野外炊事  
 田んぼ体験・田植え、草取り、イナゴ取り、  
 稲刈り  
 餅つき  
 蛭狩り  
 木登り 等である。

##### 5-4-4. 小野路里山ツアー問題点・多摩センターの観光案内所

この作戦を実施する上での課題は、小野路は町田市であるが、小野路へのバスは多摩センター駅からの出発便が主流であるということだ。そのため、小野路のガイドには多摩センター駅の案内所が必須となる。多摩市の協力がなければ成立しない。

多摩市にあるサンリオピューロランド及び多摩センター温泉施設も案内すること、小野路での体験が終わった後は多摩センター駅や町田駅に出て、新宿や江の島、思い思いの観光地へ赴く事ができることを里山文化体験とも絡めて周知・宣伝する必要である。

### 5-5. 里山入城の問題点

小野路里山にはエコトイレが散在するが、本格的水洗トイレは小野路里山交流館のみである。トイレのキャパシティから、大人数の入城は制限される。里山キャンプ、ハイキングは限られた人数のガイド付きツアーであることが条件となる。

### 6. 里山という伝統風景を守る

時がたち、地域の人達の田んぼ記憶と知恵は今、貴重になりつつある。それを引き継ぎ、再び黄金の稲穂がそよぎ、鮒や泥鰌が泳いで、それを驚が狙う、生物の多様性が確保された桃源郷を再生できないか。

現在、一点の光明は環境問題、地域の文化継承の組織に興味を持つ若者がアクティブになりつつあることである。

昔の里山の日本画を観たら、普通に「水田」を囲む里山と雑木林の風景があった。里山を囲む文化が当たり前にあったらしい。

鶴見川の源泉として湧き出す泉の周囲の田んぼの水と緑は、小さな循環系が構築され、多様な田んぼが存在する。田んぼの土壌保全は遠く東京湾に多様な生物が棲める海洋環境保全につながる。

川、湧き水への親水、水環境保全、田んぼ、里山再生の価値を社会へ再浸透させたい。里山田んぼキャンプの営み、楽しみとは文化、遊びを通貨として遣り取りする地域作りそのモノと考えられる。

人と自然の「共存」を体現する環境保全組織 (Conservation Corps) の再構築を地域に入った若者が担うべきである。

### 7. 里山の倫理を敷衍する

里山の自然が人々に心の豊かさをもたらしているのも確かだ。そこはヒトが自然の一

部の存在であり多様な生物の共同体であることを認識して、更に地域が生物多様性に自分も含まれていることを前提に生きているからである。里山は、自然環境を傷つけることが少ない、少欲、深い知恵に裏づけされた倫理を生み出すことに成功した。

江戸末期、明治初期、小野路には少し豊かで、貧しいけれど、平等・協力・信頼があって自由民権を唱える御伽噺のような『イワンのぼか』か宮澤賢治の世界を彷彿とさせる桃源郷があったと云う。江戸時代に戻って御伽噺・神話的世界が実現して、里山で出遭ったタヌキに騙されるような世界になれば本物かもしれない。

### 参考文献

- 1) [https://www.city.machida.tokyo.jp/kurashi/kankyo/kankyo/midori/shikankyo\\_ikimono/seibututayousei.html](https://www.city.machida.tokyo.jp/kurashi/kankyo/kankyo/midori/shikankyo_ikimono/seibututayousei.html) 町田市の生物多様性のページ
- 2) 高槻成紀 (2017), 都会の自然の話聴くー玉川上水のタヌキと動植物のつながり, 彩流社.
- 3) 町田市教育委員会・町田の自然編集委員会 (1978), 町田の自然-この子らのために.
- 4) 高橋春成 (2010), 人と生き物の地理改訂版, 古今書院.
- 5) 沢畑亨 (2005), 森と棚田で考えたー水俣発 ◎山里のエコロジー, 不知火書房





# 資 料



## 公益社団法人 日本キャンプ協会「キャンプ研究」投稿規程

### 【投稿資格】

1. 投稿の執筆者は、筆頭および共同ともに、公益社団法人日本キャンプ協会（以下、「本会」という）の会員に限る。ただし、本会が執筆を依頼する場合は、この限りではない。

### 【投稿原稿】

2. 投稿原稿の条件は、以下の通りとする。
  - (1) 投稿原稿の内容は、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等を対象としたものであること。
  - (2) 投稿原稿は、原則として未発表ものに限る。ただし、以下のものについては、初出を明記することで未発表のものとする。
    - 1) 各種学会等において発表要旨集等に掲載されたもの。
    - 2) シンポジウム、研究集会、講演会等で資料等として発表されたもの。
    - 3) 国、自治体、業界、団体等からの委託による調査研究報告書等に収録されたもの。
    - 4) その他、本会が特に認めたもの。

### 【投稿原稿の区分】

3. 本誌の投稿原稿の区分は、研究論文、実践報告とする。
  - (1) 研究論文は、論文としての内容と体裁を整えており、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等において新たな知見をもたらすもの。
  - (2) 実践報告は、実際に行われたキャンプ等に関する報告であり、目的・対象・プログラム・指導体制等の概要を示し、新たな取り組みや課題等が十分に整理され、今後のキャンプにおいて有益な示唆を与えるもの。

### 【執筆要項】

4. 執筆に関する細則については、以下の通りとする。
  - (1) 体裁は、A4 版タテ用紙を使用し、必ずワードプロセッサ等で作成する。
  - (2) 原稿の長さは、本文・図表・写真・引用文献を含めて、研究論文は12 頁以内（1 頁1,600 字以内）、実践報告は8 頁以内を原則とする。
  - (3) 文体は、「である」調とし、文字は、現代仮名遣いを基本とする。句読点は、「、」および「。」を用いる。
  - (4) 氏名と所属は、和文および英文の双方を明記する。表題は、原稿の内容を端的に示すもので、和文および英文の双方を明記する。
  - (5) 要旨（200 語以上300 語以内）とキーワード（5 語以内）は、研究論文のみ、英文の記載をする。
  - (6) 引用文献は、本文最後に著者名のアルファベット順で一括して、一連番号をつけて記載する。本文の引用箇所には、該当する文献番号を肩字「例<sub>1)</sub>」で示す。以下に、引用文献の記載例を示す。

（記載例）

雑誌の場合：著者名（発表年）題目、雑誌名、発行所、巻（号）、所在ページ

野外一郎（2010）キャンプの教育的効果、キャンプ研究、日本キャンプ協会、3(2)、101-112

書籍（単著）の場合：著者名（出版年）書名、発行所、所在ページ

野外次郎（2010）キャンプ教育、キャンプ教育研究社、30-40

書籍（共著等）の場合：著者名（出版年）章の題目、編者名、書名、発行所、所在ページ

野外三郎（2010）野外生活技術、野外一郎（編）、キャンプ総論、キャンプ教育研究社、25-28

### 【投稿原稿の採否】

5. 投稿原稿は、以下の掲載の採択を受けるものとする。
- (1) 研究論文の掲載の採択は、本会が委嘱する査読者2名が行う。審査の手続きは、以下の通りである。
    - 1) 研究論文の体裁に関して、本会が確認を行う。必要に応じて投稿者に修正を求める。
    - 2) 各査読者による審査結果は、次の4つのいずれかで報告され、投稿者あてに意見が付される。
      - A: そのまま掲載可能
      - B: 一部修正すれば掲載可能
      - C: 大幅に修正可能ならば掲載可能
      - D: 掲載不可
    - 3) 2名の査読者の審査結果が、共に「D」の場合は、掲載不可とする。
    - 4) 上記3)に当てはまらない場合のみ、2名の査読者の審査結果が、「A」の段階に至るまで、投稿者とやりとりを行う。ただし、査読者が相応と考える修正や補足等が、同一箇所につき3回までに満たされなかった場合は不採択とする。
  - (2) 実践報告の査読審査は行わない。ただし、不適切な表現や内容がある場合は、当該委員会が適宜助言し、投稿者が加筆修正を行った上で、掲載可能とする。
  - (3) 修正を要する研究論文や実践報告は、60日以内に再提出することとし、それを越える場合は取り下げたものとみなす。

### 【原稿の権利】

6. 本誌に掲載された研究論文や実践報告の著作権（「複製権」、「公衆通信権」、「翻訳権、翻案権」および「二次的著作物の利用権」を含む）は、本会に帰属するものとする。ただし、内容に関する責任は、当該研究論文や実践報告の著者が負うものとする。

### 【投稿方法】

7. 投稿に関する細則は、以下の通りとする。
- (1) 別紙の「キャンプ研究投稿連絡票」に必要事項を記入し、投稿原稿の計3部（オリジナル1部、コピー2部）と合わせて提出する。また、投稿原稿の電子ファイル（テキスト形式：各種メディア、電子メール等）も提出する。尚、投稿された原稿は、掲載の採否に関わらず、原則として返却しない。
  - (2) 掲載料は、研究論文および実践報告ともに5,000円とする。

投稿原稿の送付先・問い合わせ先

〒151-0052

東京都渋谷区代々木神園町3-1 国立オリンピック記念青少年総合センター内

公益社団法人日本キャンプ協会「キャンプ研究」編集事務局

電話 03-3469-0217 ファックス 03-3469-0504

E-mail ncj@camping.or.jp

掲載料の振込口座

郵便振替口座 00190-3-34031

加入者名 公益社団法人日本キャンプ協会

\*通信欄に「キャンプ研究掲載料等」と記載すること

## ◆「キャンプ研究」収録題目一覧

## ■第1巻 (1997/12/20)

[原著論文] ●障害児における感覚統合野外キャンプ ●障害者野外活動におけるアダプテーションに関する一考察 ●青少年の組織キャンプ運営に対するキャンプカウンセラーの貢献度 ●キャンプにおける食中毒の法的責任と注意義務

[実践報告] ●野外体験学習指導者養成コース事例報告 ●小学生を対象としたアドベンチャーカヌーツアーの実践報告 ●大阪府茨木市におけるリーダー育成キャンプの事例 ●アサヒキャンプ朽木村を中心とした徒歩移動型キャンプの実践報告 ●不登校の子ども達の暑い夏 ●自然体験活動の普及に関する新たな取り組み

## ■第2巻 (1998/7/20)

[特別寄稿] ●全日本学生キャンプの草創

[原著論文] ●キャンプ運営における行政主催からボランティアクラブ主催への移行に関する問題点 ●グループを理解する

[実践報告] ●体験は未来を拓く力 ●トーチトワリング

## ■第3巻第1号 (1999/6/30)

[原著論文] ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者のキャンプ ●2002年からの新学習指導要領にみる教科教育“水辺活動”実施に向けての研究 ●火の技術に関する一考察 ●喘息児キャンプにおける呼気ゲームの実践

## ■第3巻第2号 (1999/12/25)

[原著論文] ●子ども長期自然体験村と参加体験型学習システム ●思春期女子キャンパーの理解と援助

[実践報告] ●降雨が学生キャンパーの気分および影響について ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●馬のいる生活を体験する「ウマキャンプ」 ●雑木林を学びの場に ●丹沢山中移動型キャンプ「かもしかキャンプ'99」の実践報告

## ■第4巻第1号 (2000/7/26)

[実践報告] ●'99 無人島キャンプin 具志島 ●ファミリーキャンプにおける冒険教育の実践 ●無人島体験記 ●デイケアセンターぼちぼちハウス リフレッシュキャンプ ●彩光キャンプ'99 ●体育系学生の軽登山における水分摂取の効果 ●キャンプ対象の拡大～幼児キャンプの実践～ ●フィットネスキャンプを終えて ●痴呆性老人と自然を共有した「シニアキャンプ高知」の実践報告

## ■第4巻第2号 (2001/2/28)

[実践報告] ●筑後川リバーサイドキャンプin 原鶴 ●山田キャンプフェスティバル2000 ●知的障害を持つ子供たちとの長期キャンプ ●「不登校児」自然生活体験キャンプin いけだ

[原著論文] ●「環境教育の学び」の評価方法に関する文献研究

## ■第5巻第1号 (2001/6/30)

[実践報告] ●家族での乗馬体験プログラム ●幼児を対象とした野外教育の実践 ●人間関係形成の場としてのキャンプ～「未来世代 やさしさ発見!びわこキャンプ」の実践から～ ●第1回にいがた痴呆性老人キャンプin 長岡 ●ニコニコキャンプ ●丹波自然塾-新しいコンセプトを持ったシルバーキャンプのこころみ-

[研究資料] ●野外活動における冒険プログラムの役割について

## ■第5巻第2号 (2002/1/31)

[実践報告] ●アドベンチャーin 阿蘇キャンプ実践報告 ●森林環境に働きかけるキャンプ ●大沢野町アドベンチャーキャンプ ●不登校キャンプの実践報告 ●野外教育事業所ワンパク大学の幼児キャンプ ●“共育”活動としての幼少児キャンプ ●知的障害児のための教育キャンプ ●埼玉YMCA LD 児等キャンプ～つばさグループキャンプ～

[研究資料] ●キャンプ用環境家計簿の提案とその効果

## ■第6巻第1号 (2002/11/11)

[実践報告] ●体験活動における遊び非行型不登校中学生への援助 ●ウマキャンプ-馬とのかかわりを通じた教育的アプローチの検討- ●人と人 つなごう 手と手 心と心「つくしの家キャンプin 鈴鹿峠自然の家」の実践から ●「からだほぐし」を通しての人とのかかわり 第1回 ハッピーリムン～ウィリアムズ音楽キャンプ～ ●母親と乳幼児のためのキャンププログラム ●エコキャンプin 鷺敷キャンプ場 川内学童クラブ 鷺敷キャンプ場での試み

## ■第6巻第2号 (2003/3/20)

[実践報告] ●海の自然体験活動としてのカヌープログラムの開発-港の中(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み- ●カッパ体験キャンプ ●ユニバーサルキャンプ

[研究資料] ●海洋性キャンプ参加者の海浜活動体験とプログラム満足度

## ■第7巻第1号 (2003/9/30)

[実践報告] ●痴呆性老人のキャンプ体験における自己表現に及ぼす効用 ●親子いきいきリフレッシュキャンプ-事業中止から学ぶこと- ●登山プログラムにおけるスタッフのはたらきかけ-「大沢野町アドベンチャーキャンプ」の実践から-

[研究資料] ●キャンプ場のユニバーサルデザインについて ●キャンプ用環境家計簿の開発と効果

■第7巻第2号 (2004/1/30)

[実践報告] ●阿蘇五岳制覇チャレンジキャンプ実践報告 ●海の体験活動としてのヨットプログラムの開発ー湾内(閉鎖水域)におけるプログラムの一試みー ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅰ)ー白川小学校・神辺小学校・三重大学による3校合同キャンプの実践からー ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅱ)ー白川小学校・三重大学による合同キャンプin 石水溪の実践からー

[研究資料] ●長期キャンプが参加者に及ぼす効果とその維持期間ーわんぱくこども宿(10泊11日)に着目してー ●キャンプ環境報告書の提案 ●海辺を活用した総合的学習における海のイメージの変容に関する研究ー国立室戸少年自然の家主催事業「日本版School Water Wise」に着目してー ●キャンプ実習における状態不安に関する研究ー係の役割に着目してー

■第8巻第1号 (2004/9/30)

[実践報告] ●シニアと子どもの交流キャンプ ●楽しく、安全な登山をめざした中高年のキャンプ講座 ●第5回痴呆性高齢者キャンプin ぐんま

[研究資料] ●自然体験活動を志す動機について ●アメリカにおける野外教育指導者養成カリキュラムーWilderness Education Associationを事例としてー

■第8巻第2号 (2005/1/30)

[実践報告] ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●キャンプ経験が育成世代のサッカー選手のoff the pitch 行動に及ぼす影響

[原著論文] ●長期キャンプ参加者の日常生活が自主性の変容に及ぼす影響

■第9巻第1号 (2005/9/30)

[実践報告] ●おひさまクラブ親子キャンプ実施報告 ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅲ)ー白川小学校・三重大学合同キャンプの実践からー ●自閉症協会東京都支部おやじの会ファミリーキャンプ ●中高年スキーツアーと自然観察ツアー ●緑と林と防災の教室

[研究資料] ●キャンプリーダーのキャンプ用環境家計簿に対する意識調査報告 ●冒険キャンプのふりかえり場面における参加者の心理状態がキャンプ効果に及ぼす影響

■第9巻第2号 (2006/1/30)

[実践報告] ●岡山YMCA ファミリーキャンプの実践報告ー信頼の上に成立するスモールコミュニティの拡充をめざしてー ●ポーン太の森自然冒険塾「今、求められる新しい自然体験のスタイル」

■第10巻第1号 (2006/5/20) Camp Meeting in Japan 2006 ー第10回日本キャンプ会議 特集号

[口頭発表] ●キャンプにおけるカウンセラーレポートの意義ー小笠原自然ふれあい学校をふりかえって ●おさお冒険クラブの取り組みとキャンプの報告 ●くろがね倶楽部キャンプー野外活動を通してのコミュニティ ●ポーン太の森自然冒険塾 ●日本型キャンプを探る(1) ●指定管理者導入に伴う野外施設運営のあり方について ●指導補助員からみた自然学校の実態 ●リスクマップからみた安全意識の評価方法の検討 ●郷土を知る自然体験活動の事例報告 ●幼児キャンプ体験がその後及ぼす影響 ●自然体験がひとりっ子の成長に与える成果 ●カウンセリング・キャンプにおける計画・実施のあり方における一考察 ●ふりかえり活動を導入したASEが参加者の学習効果に及ぼす影響 ●冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●シニア長期滞在型キャンプ「ふぉーゆー白馬」 ●高齢者キャンプにおけるボランティアスタッフの期待と満足度 ●ユニバーサルキャンプin むろと実践報告 ●看護学校における保健体育の授業展開 ●必修キャンプ実習が参加学生の気分及ぼす影響 ●授業として行う大学生のための海外アウトドア体験プログラム

[映像発表] ●教育キャンプ再考 ●キープ森のようちえん実践報告

[ポスター発表] ●リスクに対する感覚を磨く指導者トレーニング ●福祉士養成教育における予備実習としてのキャンプ実習 ●野生の森ゆめキャンプ報告ー4年間の実践と研究 ●野外活動へのコミットメントを想定する要因について

■第10巻第2号 (2006/9/30)

[実践報告] ●郷土を知る野外活動の実践報告ーチャレンジ2702☆事業の試みからー ●ユニバーサルキャンプ2005 in むろと

[研究資料] ●「子どもと共に創るキャンプ」における学生の学び ●野外教育の実践・研究において答の出ない問題

■第10巻第3号 (2007/3/30)

[実践報告] ●聴覚障害大学生を対象にしたキャンプ実習に関する事例報告 ●我が国初のWEA 野外教育指導者養成コースの実践報告 ●Coalition for Education in the Outdoors Eighth Biennial Research Symposium 参加報告

■第11巻第1号 (2007/5/19) Camp Meeting in Japan 2007 ー第11回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●2007年は日本の組織キャンプ100周年か? ●日本の野外活動に対する中国天津市の大学生の理解程度と興味 ●アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民のキャンプ生活 ●最近5年間における野外教育研究の傾向 ●2007ACA National Conference 参加報告 ●日本キャンプ協会国際交流委員会の働きーAOCF 創立ー ●“WILDERNESS FIRST RESPONDER” 野外救急法資格取得コース ●組織キャンプ体験が子どもとその保護者へ及ぼす影響について ●看護専門学校の授業として行うキャンプにおける学生の学び ●デイ・キャンプで社会的スキルをより高めるには ●クラブ活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●学校教育における宿泊型自然体験活動の取り組みについて ●大学野外活動のプログラムの質向上に寄与するキャンプ道具の使用について ●ユニバーサルキャンプ2006実施報告

[ポスター発表] ●少年期の組織キャンプにおけるSignificant Life Experiences が成人後の環境行動に及ぼす影響 ●組織キャンプの魅力に関する研究ー花山キャンプを事例としてー ●中学校における教科と自然体験活

動の関連について ● キャンプカウンセラーの成長に関する研究 ● キャンプインストラクター養成カリキュラムの指導実習における受講者の心理的変化と自己評価 ● サンフレッチェ広島ジュニアチームキャンプ～10年の軌跡～

#### ■第11巻第2号 (2007/9/30)

[実践報告] ● あさお冒険クラブの仲間づくりとエコ・キャンプをめざしてー野外活動を通して気づくことー  
[研究資料] ● キャンプ活動が睡眠に及ぼす影響 ● 障害者キャンプにおけるバリアの研究ー身体障害者模擬患者を通してー ● キャンプ実習における参加者の期待度・満足度に関する研究

#### ■第11巻第3号 (2008/1/30)

[特集] ● 不揃いの麦から作るビールの味には深みがある  
[実践報告] ● キャンプ参加者が自己実現をはかるためのスタッフの支援についてー白山市アドベンチャーキャンプの実践からー  
[研究資料] ● クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ● 外国人チューターとのキャンプ経験がキャンプ参加者の意識や行動に与える影響  
[報告] ● 第11回日本キャンプ会議全体会報告～みんなでつくるあしたのキャンプ (キャンプ場編) ～

#### ■第12巻第1号 (2008/5/24) Camp Meeting in Japan 2008 ー第12回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ● 指定管理者団体における野外活動事業の参加者状況 ● 民間野外教育活動団体におけるサービスマネジメントに関する将来予測研究 ● キャンプ参加費に関する保護者の意識 ● 米国サマーキャンプの日課活動 (実修)

ーメイン州、キャンプ・オーアトカの場合ー ● 知的障害児のキャンプ「ニコニコキャンプ」実践報告 ● ガンバレ! 能登 震災支援キャンプ報告 ● 冬の陣と雪の吟ー「雪のスゴイ!」を体験しよう。冬の檜原湖キャンプ2008」  
● ぼるぼるキッズ2007 実践報告 ● 日本の野外活動に対する中国の (小学ー大学) 男女学生の認知度 ● 「社会力」を育成する教育プログラムの開発ープロジェクトアドベンチャーの手法を応用してー ● 連想法を用いたキャンプの効果測定を試み ● 新入生オリエンテーションキャンプが大学生の仮想的有能感に及ぼす効果 ● ファミリーを対象としたイベント型事業「あいちキャンプフェスティバル」の実践報告ー他団体との連携と運営のポイントに着目してー ● 『若者自立支援事業「本当にやりたい! ことプロジェクト」実践報告』 ● サントリー・神戸YMCA 共同プロジェクトー余島プロジェクトー ● 「読書」による観想的キャンプ生活ー中村春二口訳「方丈記」の野外教育的価値に注目してー

[ポスター発表] ● 利用者アンケートにみる静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況 ● 地域住民への自然体験活動の提供に向けた大学におけるシステムづくり ● 自由回答からみる保護者のキャンプ参加費に対する意識 ● 日本のキャンプスタンダードの開発に向けてーキャンプが青少年の成長に及ぼす効果ー ● 日本のキャンプスタンダードの開発に向けてープログラムと自然・生活環境に着目してー ● 日本のキャンプスタンダードの開発に向けてー参加者と指導者に着目してー

#### ■第12巻第2号 (2008/9/30)

[実践報告] ● 幼児キャンプの実践 ● キャンプを通じた地域づくりの試み「あしがらシニアキャンプ」

#### ■第12巻第3号 (2009/1/31)

[実践報告] ● 子どものキャンプ参加費用に対する保護者の意識ー不満足評価の視点に着目してー  
[報告] ● キャンプディレクター2 級指導者の実態・意識調査に関する報告 ● 第12 回日本キャンプ会議全体会報告～みんなでつくるあしたのキャンプ (指導者編) ～

#### ■第13巻第1号 (2009/5/23) Camp Meeting in Japan 2009 ー第13回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ● 組織キャンプにおける儀式プログラムの意義と役割ー米国キャンプ・オーアトカにおける騎士道プログラムー ● 病氣とたたかう子どもたちに夢のキャンプをー医療設備を備えた日本初のキャンプ場開設に向けた、そらぶちキッズキャンプの取り組みー ● 休止スキー場を活用したキャンプの試みー白山市アドベンチャーキャンプの実践からー ● 指定管理者団体における野外活動事業の申込状況の推移 ● 組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連 ● ロールレタリングを用いたスタッフトレーニングプログラムの開発 ● 中国における野外専門運動基地の現状ー天津市山野運動基地ー ● 実地踏査等を重視し当事者意識を重視した養成プログラムで指導者になることの意義 ● 教員・保育者を指す女子大学生を対象としたチャレンジキャンプの実践報告 ● 活動の質を高めるチャレンジとリラクスの落差の追求ー日常生活に「持ち帰り・般化・敷衍・思い出し」可能なキャンプでの身体感覚・技法ー ● 冒険キャンプにおけるキャンプ場面でのふりかえり体験の調査 ● 長期キャンプ参加者と指導者の内面的成長について考える (1) ● 体験がもたらす教育的効果 ● 幼児とその保護者における自然体験の現状ー子どもの育つ環境による自然体験の違いー[ポスター発表] ● 週末を活用した親子キャンプの試みースケートキャンプの実践報告ー ● 「スノーシューを履いて雪の原野での自然観察会」実践報告 ● 静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関する調査ー1年目結果報告ー ● Means-End Analysis を用いたキャンプ効果の要因の検討 ● 子育て支援としての「ママチルキャンプ」8 年間の経緯と継続上の課題 ● 小学校長期自然体験活動の効果とその要因ー鹿沼市自然体験交流センターを事例としてー ● 幼児キャンプにおけるイラストを用いた健康管理の試み

#### ■第13巻第2号 (2009/11/30)

[実践報告] ● 「20/20 Vision」と「多様性への挑戦」ー2009 年全米キャンプ会議に参加してー  
[研究資料] ● 教職を意識したキャンプ実習の一考察  
[報告] ● 第13回日本キャンプ会議全体会報告～みんなでつくるあしたのキャンプ (安全管理編) ～

#### ■第14巻第1号 (2010/5/22) Camp Meeting in Japan 2010 ー第14回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ● 保育者養成を目的とした組織キャンプの実践とその試み ● ホリスティックな教育キャンプ実践報告 ● G. N. C. A. スプリングキャンプ『ドリームキャンプ』報告 ● JALT プログラム内容が参加者の自己概念

変容に及ぼす影響 ●キャンパーの志向によるキャンプの効果の表れ方の違い―つながり志向性・自然体験効果・感性の関係からの考察― ●発達段階に応じたキャンプ効果の比較～メタ分析を用いて～ ●キャンプにおける場の力～ウィルダネス体験に着目して～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩み―その1 ●WEA 2010 National Conference on Outdoor Leadership参加報告 ●地域住民との協働によるフィールドづくりの試み―ツリーハウスづくりの取り組みから―なぜバックカントリースキーを求めるのか～バックカントリースキーへの移行に注目して～ ●地域活性化に貢献するキャンププログラムに関する研究～コンジョイント分析の適用～ ●知的障害高等養護学校における自然体験活動の実態について  
 [ポスター発表] ●「生きる力」を育む効果的な野外教育プログラムの検討～「アイガモを食べる」体験プログラムの効果測定～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩み―その2 ●玉川大学教育学部野外教育演習開講の背景と学生の取り組み ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果～2ヶ年調査結果の分析～ ●ウェビング・テープを使ったチームビルディング「ラクーン・サークル」実践報告および体験 ●ラボキャンプ2009効果測定調査報告 ●体験型親プログラムを取り入れた発達障害児キャンプの効果 ●アメリカ・キャンプ協会100年の歴史

■第14巻第2号 (2011/1/30)

[実践報告] ●「ドリームキャンプ」実践報告 ●水辺活動における指導者の「ヒヤリ・ハット」調査～その後を生かせる対応策とは～ ●公園での野外教育実践～プレーパーク活動を通して～ ●大学と地域の連携による年間を通じた野外教育プログラムの展開  
 [研究資料] ●自然体験活動における子どもたちが求める理想の指導者 ●キャンプ場の施設評価に関する研究～山梨県の市営キャンプ場を例として～  
 [原著論文] ●野外活動施設利用者の満足度と再利用意図に関する研究 ●専門学校生対象のチームビルディングを目的としたキャンプ実習の効果 ●キャンププログラムにおける火の使用体験と火への認識・自己成長性との関連に関する研究

■第15巻 (2012/1/31)

[特集] ●子ども達の悲しみを支えるということ―グリーンキャンプの試みにむけて― ●東日本大震災の被災者を対象とするグリーンキャンプの取り組み  
 [実践報告] ●キャンプ指導者資格を取得した教員・保育者への意識調査の試み ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題 ●カンボジアにおける青少年教育とキャンプの現状 ●Hole in the Wall Camps～病児キャンプの世界的ネットワーク～

■第16巻 (2013/3/10)

[研究論文] ●キャンプ参加児童に対する教育効果と保護者の認識・期待との関連性  
 [実践報告] ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」の実践とその成果 ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題―第2報―

■第17巻 (2014/3/10)

[研究論文] ●雪上キャンプにおけるイグルー内の環境に関する調査研究  
 [実践報告] ●南会津アドベンチャーキャンプの実践と地域連携の可能性 ●父子キャンプ(パパチルキャンプ)の実践 ●「災害に備える」野外力をきたえよう～アウトドア体験キャンプの実践報告と今後の課題

■第18巻 (2015/2/15)

[研究論文] ●大切な人を亡くした子どものグリーンキャンプの実態とその効果に関する文献レビュー ●キャンプ体験が被災地児童のメンタルヘルスと生きる力に及ぼす影響 ●ハンディ気象計による気象リスクマネジメントの可能性～トムラウシ山遭難事故(2009)報告書より～ ●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析  
 [実践報告] ●Frost Valley YMCAの価値教育 ●自然体験がキャンプ指導者の野外指導スキルに及ぼす効果  
 [事業報告] ●グリーンキャンプ・フォーラム抄録「子どものグリーンサポート～地域社会の役割・キャンプの役割～」 ●Camp Meeting in Japan 2014～第18回日本キャンプ会議～全体報告 海外のキャンプ事情～日本の状況との比較から～

■第19巻 (2016/2/15)

[研究論文] ●不登校中学生を対象とした継続型キャンプの効果に関する検討―社会教育施設と適応指導教室の連携事例― ●テーマパークでの修行体験を利用した体験教育の試み～Kidzania 就業体験と野外教育の場合～ ●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす効果に関する研究  
 [実践報告] ●民間野外教育事業者におけるスキーヒヤリハットの分析 ●高校体育科キャンプ実習報告―スポーツ選手の基礎力を育むことを目指して― ●長期キャンプの意義を改めて考える―「チャレンジキャンプ2015～リヤカーで小豆島一周110kmの旅」の事例から― ●くしろアウトドアキッズスクール2015 冒険の旅の実践 ●キャンパス近くの自然を活かした活動及び重層的な指導システム

■第20巻 (2017/2/15)

[実践報告] ●野外救急法を取り巻く最新の動向 ●ろう児のキャンプにおける親プログラム実践の成果と考察  
 [講演録] ●第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会基調講演―Organized Camping in Japan―  
 [特別寄稿] ●組織キャンプの先駆者小西孝彦が残したもの

■第21巻 (2018/2/15)

[研究論文] ●キャンプ実習における大学生の資質能力の変容―ふきだし法による自由記述の分析を通して― ●大学運動部に対するASEプログラムが集団凝集性に及ぼす影響―新入生と在学生の比較から―  
 [報告] ●第21回日本キャンプミーティング講演会 自然と手を入れた自然(園芸)の中で～人を育てる野菜作り～  
 [特別寄稿] ●野外救急法を取り巻く最新の動向



## ■第22巻 (2019/2/15)

[研究論文] ●危険な動植物の識別に関する研究 ●大学生を対象とした短期野外教育プログラムの教育効果に関する研究—大学生不登校問題に着目して—

[実践報告] ●組織キャンプのプログラムと教育効果—南会津チャレンジキャンプの実践を事例として— ●中華人民共和国の小学生を対象とした自然科学学習プログラムデザインの見直し ●北海道キャンプ協会が取り組む次世代へのバトンリレー—次世代野外教育指導者集団「えぞっぷ」— ●野外教育分野を学ぶ学生ネットワークが果たす新たな「学びの場」としての機能—「大学間交流スキーキャンプ」の活動報告— ●子供の野外体験活動を促進する「鬼ごっこ遊び」の実践とその成果 ●青少年教育施設で発生した冬期の傷病に関する調査報告 ●Leave No Traceを意識した、キャンプにおける食器洗いの実践

## ◆ CAMP MEETING IN JAPAN (日本キャンプ会議) 発表題目一覧

## ■第1回日本キャンプ会議 (1997/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[研究の部] ●グループ活動における心の安全について ●キャンプ指導者の状況認知に関する研究 ●日本における療育キャンプの歴史 ●キャンプ療法の確立にむけて ●雪中キャンプが及ぼす意識変化について ●ペグの打ち込み角と強度との関係について ●女子大生のキャンプ実習における血清脂質代謝変動について ●青少年の組織キャンプの運営におけるキャンプカウンセラーの貢献度 ●国立公園の意義とレンジャーの必要性 ●組織キャンプにおける選択プログラムの在り方について

[報告の部] ●自然環境下の保養体験による心理的・生理的変化 ●冬のサバイバルキャンプを通して ●「であい・ふれあい・かよあい」の福祉の町で野外活動における障害者とともに歩む ●ぜん息児のサマーキャンプにおける運動適正テスト ●痴呆性老人と行うシニアキャンプ ●自閉症の人たちがキャンプを楽しむために ●「O-157」が青少年施設に与えた影響 ●盛岡大学におけるネイチャーゲーム実践報告 ●(神戸—東京)中学生・高校生ふれあいキャンプ ●静岡県キャンプカウンセラー協会の活動について

## ■第2回日本キャンプ会議 (1998/5/23、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[基調講演] ●全日本学生キャンプの草創

[研究の部] ●野外炊さんの薪(マキ)の代替燃料に関する研究 ●青年期の学校キャンププログラムに関する一考察 ●参加児童・生徒による冬季キャンプの評価 ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●喘息児キャンプにおける腹式呼吸を応用した室内ゲームの実践 ●グループを理解する～喘息児キャンプにおけるA子を通じて ●キャンプの評価～キャンパーが意識するキャンプの効果を中心として ●高齢者キャンプの効果について考える～血圧および血循環動態に及ぼす影響 ●組織キャンプにおける選択プログラムのあり方について (2)

[報告の部] ●ACA アメリカキャンプ協会総会報告 ●OBS 冒険を通しての体験学習 ●こども糖尿病キャンプの現状と課題 ●フロンティアアドベンチャー事業のその後 (1) ●フロンティアアドベンチャー事業のその後 (2) ●自然生活体験キャンプ実践報告 ●青少年のボランティア体験としての福祉キャンプ ●野外活動指導者その専門家としての条件～横浜市野外活動指導者養成講座ジェネラルディレクターの立場から

## ■第3回日本キャンプ会議 (1999/5/22、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●台湾における童軍(ボーイスカウト)教育に関する研究 ●ACA 公認滞在型キャンプの分析 ●火打ち金による火付け法 ●キャンプにおける薪への着火についての実験的研究 ●自然教室における火起こしプログラムの理科実験的展開 ●星美ホームに於ける野外活動の可能性～日本横断徒歩旅行を通じて～ ●知的障害者社会就労センターのキャンプの実践 ●障害者キャンプの実際～木の実の森の実践～ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●進学塾における野外教育への取り組み ●市立キャンプ場・キャンプカウンセラー卒業生の活動について ●1ヶ月の長期自然体験キャンプ「心のふるさと村」報告 ●生きる力を育む自然教育けやの森学園スノーキャンプ実践報告 ●キャンプとNPO ●日本キャンプ協会の誕生 ●高齢者キャンプの効果について考える (II) ～5泊6日のキャンプ生活における血圧、加速度脈波の変化～ ●思春期の女子キャンパーを理解する～性に対する関心を中心に～ ●野外活動の指導におけるアポトシス～活動の目的化をめざして～ ●キャンププログラムにおける軽登山中の水分摂取に関する研究～体育系学生のキャンプ実習～

## ■第4回日本キャンプ会議 (2000/10/2～5、国立オリンピック記念青少年総合センター)

※第4回日本キャンプ会議は第5回国際キャンプ会議と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

## ■第5回日本キャンプ会議 (2001/5/19、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●幼児対象野外教育の実践報告 ●自然からの自己発見～共に創りあげる～ ●キャンプカウンセリングの体系化の試み ●長期キャンプにおける子どもの自主性の発達とその原因 ●知的障害児のソリ遊びキャンプ ●障害児キャンプの企画と運営—YMCA プロジェクト・SEED のケース— ●障害者キャンプを支えるボランティアのシステム～キャンピズの会員制度を中心に～ ●キャンプ・インストラクター課程認定校における認定プログラムの実践報告 ●登山用ストック使用の有無が登山者に与える影響 ●白馬シニアキャンプ協会設立レポート ●子どもの生活自立の「もと」を引き出す野外体験 ●サイエンスキャンプ ●キャンプと音楽 ●生ゴミサイロを利用した環境教育

## ■第6回日本キャンプ会議 (2002/5/18、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●自然との接点への実践例としての提案 ●新しいキャンプへの取り組み—ハイテクキャンプと竹をテーマとした参加体験キャンプ ●夏季ゼミキャンプにおける他者観察の変動 ●戦前の社会事業におけるキャンプ活動 ●キャンプでする大学入試 ●山梨大学における学生主体型キャンプの実践報告—アウトドアパスーツの授業において ●丹波自然塾のあゆみ ●乳幼児と母親のためのキャンププログラム ●キャンプで気づく便利さにつ

いて ●課程認定校におけるキャンプ・インストラクター資格継続への試み ●児童・生徒におけるバックパッキングプログラムの実践報告 ●知的障害児のための教育キャンプの実践 ●知的障害ボーイスカウト・ローバール隊の北海道遠征 ●キャンプと音楽療法

■第7回日本キャンプ会議 (2003/5/17、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●組織キャンプにおいてグループリーダーの書く記録 ●精神障害者側の立場から見たキャンプの必要性 ●不整地サイトにおける車椅子体験キャンプの実践 ●キャンプにおける参加者の「ソーシャルスキル」の変化について ●English Immersion Camp における子どもたちの変化と成長 ●ハワイ・カウアイ島アドベンチャーキャンプ 2003 ●長期キャンプ“わんぱく子ども宿 (10泊11日)”の効果 ●兵庫県自然学校指導補助員に関する調査 ●キャンプ・インストラクター取得者の活動への取り組み ●親子参加型自然学校に関する調査 ●キャンプと音楽療法 2 ●多摩川を題材とした環境教育的プログラムの提案 ●馬との関わりが対人関係に及ぼす効果 ●体験学習としてのキャンプ ●キャンプにおける女子高校生の自己概念の変容課程 ●登山下山の不安と疲労に関する研究 ●空気圧縮式発火具をつくる ●キャンプに「軍手」は万能でない ●焚き火のイメージに関する研究

■第8回日本キャンプ会議 (2004/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●自然体験活動指導者の動機に関する研究 ●幼少年期の自然や人の関わりと自然体験活動への興味の関連について ●キャンプ中の感情の変化について ●子どもを主体にした新しいキャンプ ●沖縄わんぴーすキャンプ ●学校へのキャンプの誘い ●「自然体験冬の陣」を通してのスタッフの学び ●大学生を集める CAMP ●組織キャンプと社会福祉 ●キャンプインフォメーションセンター相談記録より ●Leave No Trace アメリカの野外教育指導者養成における実践 ●アメリカにおける野外教育指導者カリキュラム相談記録より ●幼児のための雪上野外活動 ●第27回ウィンタースクール実践報告

■Camp Meeting in Japan 2005 -第9回日本キャンプ会議 (2005/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●野外教育指導者養成キャンプの実践報告 ●大学カリキュラムにおける野外教育プログラム ●子どものための週末キャンプ ●授業として試みたアラスカ犬ぞり体験プログラム ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●第12回わいわいチャレンジキャンプ実践報告 ●2004夏の体験学習 夏!君の勇気にか・ん・ぱ・い ●母親グループが運営する自閉症児の雪上キャンプ ●野外教育セミナーin ニューヨーク報告 ●ACA National Conference 参加報告 ●国際自然大学校日野春校の取り組み ●自然体験活動冬の陣イグルー完成 (映像発表) ●雪上キャンプでの敷物の断熱効果実験 ●キャンパーが影響を受けた活動について ●野外トイレの研究 ●自然学校が与えた影響について ●山村留学における相談員の業務 ●キャンプにおける呼称についての研究 ●自然体験活動におけるボランティア指導者の意識に関する研究 ●災害と野外活動 (私の体験) ●OBS プログラム継続参加者のセルフエフィカシーの変容 ●ふりかえりがキャンプの効果に及ぼす影響 ●異文化交流キャンプが参加者の国民性理解に及ぼす影響 ●アジアキャンプ連盟 (ACF) の創立

■第15回 Camp Meeting in Japan 2011 (2011/9/22~25、静岡県立朝霧野外活動センター)

※第15回日本キャンプ会議は日本キャンプ協会設立45周年記念 第20回全国キャンプ大会 CAMP FESTA 富士・朝霧と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■Camp Meeting in Japan 2012 -第16回日本キャンプ会議 (2012/5/26、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[特別講演] ●「グリーン(ワーク)×キャンプ」にできること  
 [口頭発表] ●防災教育に必要とされるキャンプ技術～石巻での21日間の支援から～ ●「～のんびり遊ぼう～ニコニコキャンプ!!」リフレッシュキャンプの実践報告 ●「福島の子供たちとその家族に笑顔を」～アカデミーキャンプの実践報告～ ●YMCA フレンドシップキャンプ～子どもらしく過ごせる時間を取り戻す ●県外避難者の子どものケアとキャンプ ●三鷹子どもの楽校 福島の子供たちと森の楽校サマーキャンプ～「つくる」を遊ぶ夏季学校～ ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査～その1 ●レスキューザックの開発と効果 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームの開発 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームのデモンストレーション ●キャンプ指導者養成におけるスキル習得に関する考察 ●沖縄の無人島キャンプにおける自己・他者肯定感の変容 ●年間利用者8,000人超の「立少トントンたんけん隊」の実態と今後の展望 ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その1 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響～その1 ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題 (第2報)  
 [ポスター発表] ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果(3) - 4ヶ年調査結果の分析 - ●東日本大震災被災地でのグリーンキャンプの実践報告「岩手しぜんとあそびキャンプ in テンパーク」の取り組み ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その2 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響～その2 ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査～その2

■Camp Meeting in Japan 2013 -第17回日本キャンプ会議 (2013/5/25、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[口頭発表] ●社員教育研修としての野外活動プログラムの可能性 - Outdoor Training Program を導入した TS Camp - ●参加目的に着目した組織キャンプ参加者の特徴 - 白山市アドベンチャーキャンプの実践から - ●多文化での野外教育プログラムから考えたこと ●冒険的自然体験キャンプ「私たちの4日間」 ●幼稚園・保育園との連携～あかぎの森のようちえん実践報告～ ●岡山県の中山間地域における自然体験活動の実践報告 ●グリーンケアキャンプに参加して～被災地の子供たちとともに～ ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●静岡県における不登校キャンプの取り組みについて ●国立青少年教育施設の取り組み - 新しい公共型運営について - 国立赤城青少年交流の家の取り組みから - ●自然体験活動におけるマダニ対策について考える～広島県での取り組み(報告)～

[ワークショップ発表] ●ウィルダネス教育協会指導者資格認定コースの報告と今後の展望 ●キャンプで使える「手話」表現

■Camp Meeting in Japan 2014 -第 18 回日本キャンプ会議 (2014/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[口頭発表] ● LEAVE NO TRACE の日本での必要性和普及について ●環境ボランティアリーダー海外研修 (ドイツ) 報告 ●組織キャンプにおける Leave No Trace プログラムが参加者の環境に対する態度に及ぼす効果 ●東京 YWCA 森林ワークキャンプ～プロに学ぶ森づくり体験～ ●ウィルダネス教育におけるウィルダネスの場についての検討～わが国での実践にあたって～ ●国際ワークキャンプ参加報告と参加動機に関する調査 ●キャンプカウンセラーのユーモア表出が参加者の集団雰囲気と及ぼす効果 ●大学野外実習が体力・メンタルに及ぼす効果に関する研究 ●キャンプの力はこんなところにも!～ストレス耐性を高める効果～ ●ICU ジュニアキャンパス・キャンプ～大学施設を使った大学らしい子どもキャンプの実践～ ●関東甲信越地区青少年施設協議会青年部会の取り組み～アメージングガイドができるまで～ ●災害時対策教育プログラムの実践について

[ポスター発表] ●キャンプの国際比較 その 1「日本型キャンプ」をさぐる 1-2 日本のキャンプスタイル ●岡山県 A 大学におけるキャンプインストラクター養成実習の現状と改善策 ●地域のチカラを活かしたコラボレーション～通年型農業キャンプ 風っ子ファームの取り組み～ ●南会津アドベンチャーキャンプの事業評価と地域連携 ●青少年の体験活動等に関する実態調査 (平成 24 年度調査) の報告

[あれこれ発表] ●『ハンディ気象観測ツール』によるアウトドアリスクマネジメント ●アメリカ組織キャンプからの学び ●続・キャンプで使える「手話」表現～目で見てわかるコミュニケーション～ ● One Minute Camp Evaluation Experiential Education Evaluation Form 改訂版の体験

[全体会] ●海外のキャンプ事情～日本の状況との比較から～

■Camp Meeting in Japan 2015 -第 19 回日本キャンプ会議 (2015/5/30、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[口頭発表] ●わが国におけるアウトワード・バウンドを基礎とした冒険教育の動向についての一考察 ～文献による調査を通して～ ● Day Camp の可能性～1 日の中で子どもたちに主体をあずける～ ●米国キャンプ・オーアトカ (Camp O-AT-KA) における日課プログラムの意義～余暇教育としてのキャンプ・プログラム～ ●北海道教育大学岩見沢校における指導者養成 ●キャンプが児童のアサーション行動に及ぼす影響 ●登山におけるストレスコーピングに関する研究 ●スポーツチームに対する ASE プログラム導入が集団凝集性に及ぼす影響・チーム所属年数に着目して ●WEA 野外指導者養成コースにおける野外指導スキルの発達 ●災害ボランティアとキャンプ ●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析 ●スキーキャンプのヒヤリハット ●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす影響 ●大学の授業としての、場に注目したカナダ厳寒期の多国籍遠征 ●あかぎワールドコミュニティ～余暇教育としてのキャンププログラム～ ●自然体験で地域づくり まえばし・マイはし・プロジェクト ●「海ガキ・山ガキになろう! 2014 夏」実践報告

[ポスター発表] ●公園における親子を対象とした自然体験活動プログラムの可能性 ●キャンプ体験が参加児童の道徳性に及ぼす影響 ●静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況の推移とアンケートから施設の可能性と課題を探る ● Café de CAMP の作り方～参加者をつくる空間～

[あれこれ発表] ●続々・キャンプで使える「手話」表現～目で見てわかるコミュニケーション～ ●工作体験 (お箸づくり) を通じての安全で正しいナイフの使い方～ビクトリノックス工作イベントサポートプログラム～ ●ハンディ気象観測ツールによるアウトドアリスクマネジメント(実践編)

[全体会] 子どもシンポジウム ●ろう (聾) の子どものためのキャンプ～デフキッズキャンプ～ ●被災地域の子どものためのキャンプ～南会津アドベンチャーキャンプ～

■Camp Meeting in Japan 2016 -第 20 回日本キャンプミーティング (2016/6/4、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ポスター発表](研究発表) ●国立青少年教育施設における冒険教育プログラムの取組 -ジュニアチャレンジ淡路島一周- ●キャンプ体験が小中学生のアサーティブに及ぼす影響 ●大学キャンプ実習におけるストレスサーとストレスコーピングに関する研究 ●体育授業における ASE の効果について ●森のようちえん活動が幼児の運動能力に及ぼす影響 (実践発表) ●わが国におけるリープ・ノー・トレイスのこれまでの取り組みと今後の展望について ●知的障がい者に対する日常生活に変化を作り出す地域生活支援～ユニバーサルキャンプを通して～ ●チャレンジキャンプ 2015～リヤカーで小豆島一周 110 kmの旅～ ●千葉市少年自然の家主催事業「セブンデイズキャンプ」の実践報告 ●オフザピッチトレーニングとしての雪上野外研修プログラムの実践 ●保育内容研究と自然・生活・あそび ●大学授業での長期バックカントリーキャンプ ●ろう・難聴の子どもキャンプに参加した聞こえるスタッフのふりかえり～デフキッズキャンプの実践から～ ●町田ゼルビアにおける自然体験活動の実践報告 ●2015年多摩の自然学校 ●無人島キャンプの実践 ●米国大陸横断体験記

[ワークショップ発表] ●キャンプで美味しい! コーヒーの入れ方教室 ●フィールドワーカーのための危険生物 “ハチ” “ヘビ” 対策セミナー&交流会 ●私たちはリスクに対する説明責任をどう果たすのか How do we achieve accountability for risk? ●環境教育プログラム「プロジェクト・ワイルド」を体験してみよう

[講演会]つながりを生み出すインプロ(即興演劇)(講師:高尾 隆 氏)

■Camp Meeting in Japan 2017 -第 21 回日本キャンプミーティング (2017/6/10、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ポスター発表] (研究発表) ●キャンプにおけるボランティアマネジメントの日本と海外の比較調査 ●キャンプにおけるふきだし法の有効性について ●大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ ●スペシャルニーズキャンプへのボランティア参加による知的障がい者に対する態度変容 ●スペシャルニーズキャンプの学生ボランティアにおける自己効力感の変化 ●わが国の冒険教育の動向から探る現代的課題について (実践発表) ●キャンプにおけるパーベキュー食材の新たな有効性 ●森の幼稚園など自然保育にキャンプの知識と技術をどのように活用するか ●少年サッカーチームを対象とした継続型キャンプの実践事例 ●第 6 回ア

アジア・オセアニア・キャンプ大会(AOCC2016) 報告 ●大学間交流スキーキャンプの取り組み (団体紹介)  
●スペシャルニーズ・キャンプ・ネットワーク ●「出会いと体験の森へ」実行委員会 ●北海道キャンプ協会  
若手指導者団体「えぞっぶ」

[ワークショップ発表] ●組織キャンプにおけるチャイルド・プロテクションについて ●YMCA 三浦ふれあいの村防災ウォークラリーの取り組み ●ハチ・ヘビ・マダニ・ヤマビル・毛虫 etc…危険生物を楽しく学ぶ 野外教育者のための危険生物クイズ大会! ●キャンプでのクラフト ●「違いを祝福し、違いを喜ぶ。」キャンプロイヤル体験報告 ●「アイスブレイク十人十色 ～みんなの十八番、大交換会!～」

[講演会] 自然と手を入れた自然(園芸)の中で～人を育てる野菜作り～ (講師: 藤田 智 氏)

■Camp Meeting in Japan 2018 -第 22 回日本キャンプミーティング (2018/6/9、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ポスター発表] (研究発表) ●アウトドアリーダーシップに関する文献研究 ●危険な動植物の識別に関する研究 ●大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ(第2報) ●青少年教育施設における指定管理者制度導入の状況と課題 ●参加児童生徒のもつ組織キャンプ経験の自伝的記憶 (実践発表) ●森の幼稚園など自然保育における野外活動の知識と技術の実践 ●こども英語教室ラボ・パーティファミリーキャンプ実践報告 ●キャンプファイヤーにおける民俗芸能のレクリエーションとしての活用 ●キャンプ指導者向けのスノーキャンプ・スキーイベントに関する研修事業の試み ●第11回国際キャンプ会議 Sochi・Russia と ICF の活動の報告 ●西表島 LNT プロジェクト (都道府県キャンプ協会取り組み紹介) ●Enjoy Camping! キャンプを楽しむたっぷり学ぶ(東京都) ●静岡県キャンプ協会(静岡県) ●持続可能な協会運営の知恵と工夫愛知県キャンプ協会のとりくみ(愛知県) ●近畿ブロックにおけるビジョン 2020 の実施状況(近畿ブロック) ●広島県キャンプ協会の取り組み(広島県) (団体・活動紹介等) ●スペシャルニーズ・キャンプ・ネットワーク ●北海道キャンプ協会若手指導者団体「えぞっぶ」

[ワークショップ発表] ●目からウロコの SAM スプリント固定法 ●誰でも手軽に自然体験活動が指導できるアウトドアゲーム ●「アイオレシート」の紹介 ●企画博覧会『ヒアリとその他の危険生物展』&危険生物お悩み相談会 ●アウトドアメーカーが直接紹介する最新キャンプグッズ(提供: ロゴスコーポレーション)

[講演会] うんこはごちそう～人と自然の共生は野糞から～(講師: 伊沢 正名 氏)

■Camp Meeting in Japan 2019 -第 23 回日本キャンプミーティング (2019/6/8、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ポスター発表] (研究発表) ●国際的なキャンプのムーブメントを探る-International Camping Fellowship の活動の分析から ●指定管理者制度導入に伴う都道府県・政令指定都市設置のキャンプ場における公費負担に関する研究 ●大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ(第3報) (実践発表) ●障害者支援施設でのキャンプ実践 ●キャンプディレクター2級養成講習会について-東京都キャンプ協会の事例から- ●第7回大学巻交流スキーキャンプの報告-その価値と今後に向けて- ●高校サッカー部新入生を対象とした2年間の ASE キャンプの実践 ●次世代野外教育指導者団体「えぞっぶ」による北海道キャンプフェスタの取り組み ●キャンプ指導者を対象とした研修事業の実際～東京都キャンプ協会の試みから～ ●南郷山天幕生活をふりかえる～日本 YMCA キャンプ 100 周年～ ●大和川を 20km 歩くキャンプ-小学2年生にどこまで任せるか?-

[ワークショップ発表] ●野外教育史 ●防災減災教育論 ●キャンプと法律(入門) ●キャンプ推理学 ●外国人・留学生を対象とした引率方法論 ●キャンプの安全マネジメント ●自然体験活動における絵本活用法 ●組織キャンプにおける大学生カウンセラーの在り方とこれから

[講演会] 令和時代の新しいキャンプに向けて-昭和・平成時代の「野外」の変遷とこれからのキャンプに期待すること- (講師: 星野 敏男 氏)

※ Camp Meeting in Japan 2006 -第 10 回日本キャンプ会議から Camp Meeting in Japan 2010 -第 14 回日本キャンプ会議までの発表抄録集は『キャンプ研究』(毎巻第1号)として編集されています。

※『キャンプ研究』および『日本キャンプ会議抄録集』は有料で頒布しております。ご希望の方は、日本キャンプ協会事務局までご連絡ください。

- ・『キャンプ研究』 各 (本体価格 1,000 円+税) 送料別
- ・『日本キャンプ会議抄録集』 各 (本体価格 1,000 円+税) 送料別

なお、以下の号は完売しました。

- ・『キャンプ研究』第2巻、第4巻第1号、第12巻第3号
- ・『日本キャンプ会議抄録集』第1回～第5回

## 編集後記

今年もキャンプにまつわる幅広く様々な深度の情報が集まりました。キャンププログラムのブラッシュアップのため、そしてキャンプの魅力をより分かりやすく社会に伝えていくために活用していただけるものばかりです。研究論文では、日本の組織キャンプの歴史探索の新たな1ページを一緒に見ていただくことができますし、多数の実践報告では、プログラムそのものの内容、結果、考察から読者も共に考え示唆を与えてくれるもの、そして、次のキャンプで実践してみたいくなるような具体的なスキルについての実験の報告まで幅広く掲載されています。ぜひ隅から隅までお楽しみいただければ幸いです。

そして今回で23巻目となったキャンプ研究ですが、約20年前、1997年に発行された第1巻の内容を見ても今なお参考になる情報が掲載されています。組織キャンプを軸に情報を収集し、掲載した冊子は日本で他にはありません。その貴重な情報を財産として持っている私たちは、その知見をよりよい形で生かしていきたいところです。

最後に、近年2月に発行しておりましたキャンプ研究ですが、今回第23巻から1月の発行となりました。これからもご愛顧どうぞよろしくお願いいたします。

## キャンプ研究

第23巻 2020年1月15日発行

編集発行者 公益社団法人日本キャンプ協会 キャンプ研究編集事務局

発行所 公益社団法人日本キャンプ協会

National Camping Association of Japan

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

国立オリンピック記念青少年総合センター内

TEL 03-3469-0217 FAX 03-3469-0504

E-mail [ncaj@camping.or.jp](mailto:ncaj@camping.or.jp)

©公益社団法人日本キャンプ協会

写真、論文、資料のコピー、複製・転載を希望される場合は、ご連絡ください。



**NCAJ**

National Camping Association of Japan

# キャンプ研究

第23巻 2020年1月発行

ISBN978-4-904008-16-4

C9075 ¥1000E



9784904008164



1929075010006

## 研究論文

日本における組織キャンプのひとつの萌芽

—学習院の遊泳実習について—

吉田大郎・林健児郎・酒井哲雄

## 実践報告

留学生・外国人を対象とした野外教育・宿泊研修の注意点

—東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科の事例をもとに—

三宅祐司

デイキャンプ実習に参加したC大学保育・幼児教育専攻学生の生きる力の変容

—先行研究(2泊3日)との比較による成果と課題の分析—

古田康生・山本孔一

高校サッカー部新入生を対象とした組織キャンプの実践

—チームビルディングを目的とした Action Socialization Experience の導入—

高橋宏斗・伊原久美子・矢野達也・今村樹

野外で『うまい飯を炊く』調理法の検討

—飯盒炊飯を負の歴史から考える—

倉品康夫・宮内麻里香・柏木舞・滝島慎・露木拓実

地域研究：里山キャンプを考える

宮内麻里香・柏木舞・滝島慎・露木拓実・倉品康夫

## 資料

「キャンプ研究」投稿規程

「キャンプ研究」収録題目一覧

「日本キャンプミーティング」発表題目一覧



NCAJ

National Camping Association of Japan

定価(本体価格 1,000 円+税)